●2015-2016 年国際教育交流事業●

中国政府日本教職員招へいプログラム
実施報告書

北京市・寧夏回族自治区・上海市

2016 年 6 月 12 日（日） ― 6 月 19 日（日）

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

1. 実施概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

2. 表敬訪問・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

3. 学校訪問・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

4. 歴史と文化訪問・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

5. 成果と今後への活用・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29

6. 随行者のコメント・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42

（写真、実施要項、日程表、参加者リスト・関係者リスト、過去のプログラム実績）

国　際　連　合　大　学　（UNU）

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

はじめに

国際連合大学（UNU：United Nations University）は、アジア太平洋地域の教職員や教育分野の専門家等の資質の向上と相互理解の促進を目的として、2002 年より日本政府の拠出金をもとに「日本国際教育交流プロジェクト」を実施してきました。国際連合大学はこの一環として、交流事業を公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU：Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO）へ委託し、広く展開しています。

2002 年からはじまった「国際教育交流事業」では中国教職員の招へいプログラムを実施しており、これまでに延べ 1,588 名の中国教職員を日本に招へいしてきました。

翌 2003 年からは上記プログラムと対をなすものとして、毎年 10 名程度の日本教職員を中国へ派遣してきました。これらの交流事業の成果が中国政府に評価され、日中国交正常化 35 周年を記念する 2007 年からは中国の教育部による招へいプログラムとして、参加人数を倍増し、日中教職員相互交流のさらなる発展を目指して実施されるようになりました。

このたびの「中国政府日本教職員招へいプログラム」は、2016 年 6 月 12 日から 6 月 19 日に実施され、過去 2 年間に中国教職員の受け入れにご協力いただいた自治体や学校の教職員、次期受け入れを予定していただいている自治体や学校の教職員等、計 25 名が参加しました。

参加者は北京市で中国教育部による同国の教育事情や制度について説明を受けたのち、寧夏回族自治区と上海市での教育行政機関、学校および教育文化施設等の訪問を通して、中国における教育の現状と課題、訪問都市の教育の特徴、及び両国における教育課題の共通点と相違点について学ぶとともに、中国の教職員、児童生徒との交流を図ることができました。

このたびの訪問が、中国の教育や文化に対する参加教職員の理解を深めることはもとより、帰国後の諸活動を通じて日中の教員間、学校間の交流のいっそうの発展に役立つよう願ってやみません。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました、中国教育部、中国駐日本国大使館、文部科学省、及び、寧夏回族自治区教育庁、訪問先の各学校をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2016 年 8 月

国際連合大学
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

1. 実施概要

実施期間　2016 年 6 月12 日～6 月 19 日 (8 日間)

今回のプログラムでは、中国教育部、寧夏回族自治区省教育庁の協力を得て、北京市で 1 校、寧夏回族自治区銀川市で 4 校、上海市内で 1 校の学校を訪問した。各訪問地では、中国教育部表敬訪問、寧夏回族自治区教育庁表敬訪問、学校訪問に加え、教育関係者との意見交換や文化遺産・文化施設等の見学を通じて教育交流を行い、そこから多くを学び取り帰国した。

参加者構成

今回の訪問団の参加者の構成は、以下のとおりである。2016 年 1 月に実施された中国教職員招へいプログラムの受入自治体である、熊本県荒尾市教育委員会、長崎県長崎市教育委員会から選出された教職員、同プログラムにおける東京近郊の訪問学校から選出された教職員、そして 2014 年、2016 年の中国教職員訪日の際の訪問学校、2016 年 11 月及び、12 月に訪問する高知県教育委員会、奈良市教育委員会から選ばれた教職員、加えて公募により選ばれた教職員を合わせ、合計 20 名の参加となった。このほか、国際連合大学と文部科学省の代表者、およびユネスコ・アジア文化センター職員の計 5 名が同行し、合計 25 名が日本教職員訪問団として中国へ向かった。なお、今回の日本教職員訪問団の団長は、大牟田市立羽山台小学校校長の宮下哲夫氏、副団長は長崎市立高城台小学校校長の河田重吉氏である。

オリエンテーション

出発前日の 6 月11 日、参加者らは東京都内のホテルの会議室に集合し、事前オリエンテーションを行った。オリエンテーションでは、本プログラムの主催者である国際連合大学大学院事務局長の古田知美氏、文部科学省初等中等教育局課長補佐の齊藤大輔氏、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター人物交流部部長の進藤由美があいさつをした。

続いて文部科学省生涯学習政策局参事官付専門職の新井聡氏より、中国の教育概要、近年の教育改革の動向についてなどの講義があった。参加者がそこで得た知識は、中国訪問中、現地での見聞を深めるための基礎知識として大いに役立つものとなった。

その後、情報共有会の時間も設けられ、プログラム中の役割分担等について話し合った。

第 1 日　北京到着

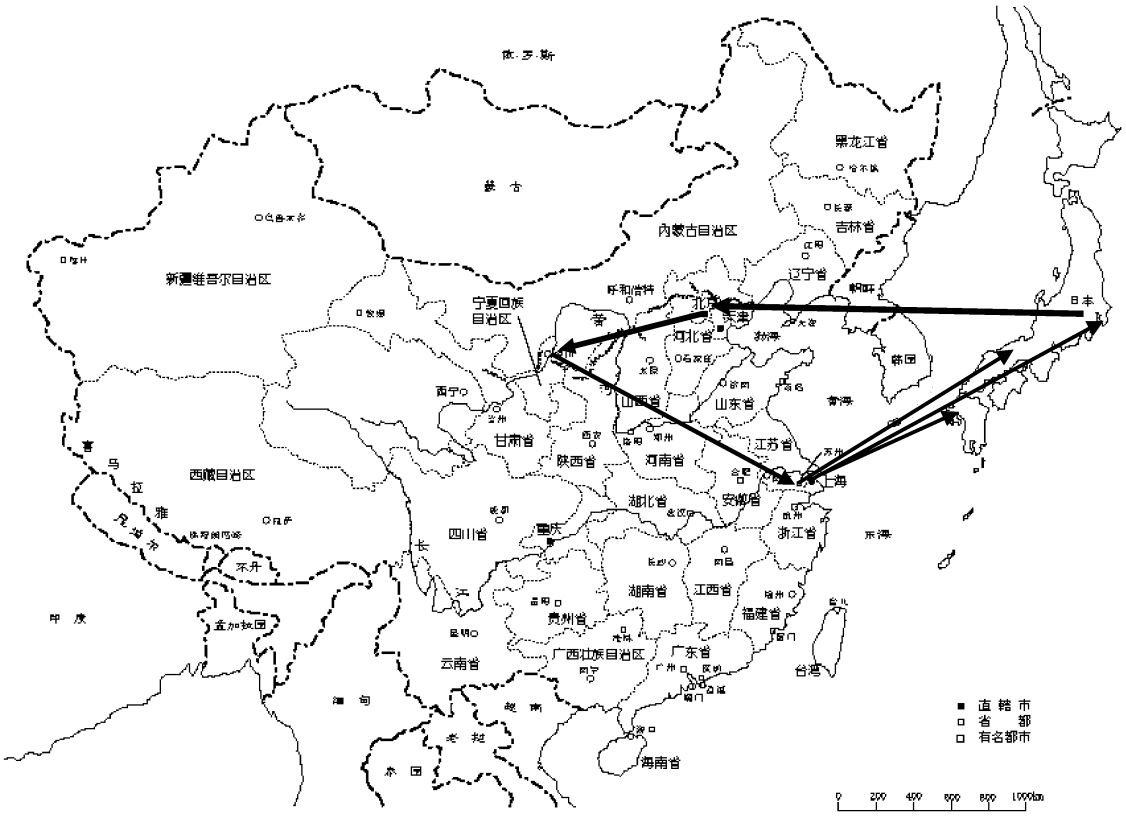
6 月 12 日の早朝、訪問団 25 名は羽田空港から北京首都国際空港に向けて出発した。空港では、中国教育国際交流協会国際協力部の徐頴(XU Ying)氏の出迎えを受けた。徐氏と合流した訪問団一行は、専用バスで昼食会場へ向かい、その後故宮博物院と天安門を見学した。明・清朝の歴代皇帝が暮らした宮殿建築の故宮博物院と、現代中国への歴史転換の舞台となった天安門は、ともに圧倒的な広さと荘厳さがあり、訪問団は肌で歴史の壮大さを感じた。

第 2 日
学校訪問・中国教育部表敬訪問・歓迎会 (北京)

6 月13 日午前、一行は北京師範大学附属実験中学を訪問した。同校は 2017 年、創立 100 年を迎える歴史ある高等学校で、中国全国でも屈指の進学校である。学校内には、唐時代の歴史的代物や生徒の作品を展示する展示室が設備され、訪問団一行は、歴史を感じつつ、生徒の個性を伸ばす同校の学風に感心した。

その後、隣接する中国教育部への表敬訪問を行った。中国教育部では、はじめに国際協力交流司副司長の陳盈暉(CHEN Yinghui)氏による歓迎のあいさつがあった。続いて、質疑応答の時間では、日本教職員訪問団からの質問の他、中国側からも日本の教育事情について質問が出され、お互いに相手国の教育制度や方針について情報を得、相違点を理解することができた。この日の中国教育部主催の歓迎昼食会には、表敬訪問で対応頂いた陳氏、他 2 名が中国教育部を代表して出席し、訪問団と歓談し交流した。

昼食後、訪問団一行は、北京五輪のメイン会場であった北京国家体育場(鳥の巣)の外観を見学した。同日夜には北京を発ち、空路で寧夏回族自治区銀川市に向かった。



第3日

教育庁表敬訪問・学校訪問（寧夏回族自治区）

6月14日から16日にかけて、一行は寧夏回族自治区の行政機関と学校を訪問した。寧夏回族自治区に滞在中は、寧夏大学で日本語を教える于虹氏が日本語通訳を務め、同大学の学生 2 名も通訳補助として同行した。寧夏回族自治区は中国のほぼ中央に位置し、黄河の中・上流が同自治区の北部を流れている地域である。

14 日午前、訪問団は首府・銀川市にある寧夏回族自治区教育庁を表敬訪問した。まず、教育庁を代表して国際協力部交流処の処長孫忠銘(SUN Zhongming)氏より歓迎のあいさつと出席者の紹介があり、日本側から、団長の宮下氏が、今回の歓迎に対する感謝と今後の学校訪問への期待を込めてあいさつをした。続いて、寧夏回族自治区教育庁の副庁長王建平(WANG Jianping)氏から、同自治区では、教育に重点を置いている点や、貧困地域の教育政策についてなどの説明を受け、訪問団は理解を深めた。質疑応答では、教員の育成や少数民族の教育などについて質問が出された。

この日の寧夏回族自治区教育庁主催の昼食会では副庁長の王氏が歓迎のあいさつをし、日本側は国際連合大学の古田氏が歓迎に感謝の意を述べた。一行は、当地名物といわれる羊肉料理を堪能し、中国回族の食

《中国の教育に関する基礎データ》

◆中国の総人口 1,367.82 万人

	学校数	生徒数	教員数
小学(小学校)	201,377	94,510,651	5,633,906
初中(中学校)	52,623	43,846,297	3,488,430
高中(普通高等学校)	13,253	24,004,723	1,662,700
特別支援学校	2,000	394,870	48,125

＊2014 年データ
出典:中国教育部 http://www.moe.gov.cn/

◆訪問都市の人口と面積

北京市(2015 年統計)

面積	16,410.54 ㎢
人口	2,170 万 5,000 人

銀川市(寧夏回族自治区)(2015 年統計)

面積	9025.38 ㎢
人口	216.41 万人

上海市(2015 年統計)

面積	63405.5 ㎢
人口	2.415 万 2,700 人

出典:JETRO 中国エリア別情報、
中国・銀川 www.yinchuan.gov.cn

文化に触れた。

昼食後、訪問団は 2 校目の銀川市第二十一小学校を訪問した。同校は、人間的な心、国際的視野を持つ児童の育成を目指している。実際に、児童が英語で訪問団と楽しく会話する様子が見られた。また、児童が竹ダンスやカップダンスに誘う場面もあり、訪問団は、銀川市の子どもたちとの初めての交流に目を輝かせた。

第 4 日　学校訪問（寧夏回族自治区）

6 月 15 日午前、訪問団一行は 3 校目となる銀川市第二十四中学南校区を訪問した。同校は、1958 年創立後、2014 年に 4 万㎡の広大な敷地を有するキャンパスに移転している。設備が充実した専門教室が多くあり、教育環境が整っていた。一行は、体育の授業を見学し、参加者の中には、バドミントンや卓球をする生徒に混じって、自ら交流を深める者もいた。訪問を終えるときには、たくさんの生徒が日本教職員の周りを取り囲み、別れを惜しんでいた。

午後は 4 校目の寧夏育才中学を訪問した。同校は、銀川市南部地域の貧困の子どもたちが入学する全寮制の高等学校である。学費・寮費は無償で、学校は政府や自治区からの補助金で運営されている。「知識で運命を変える、 品行は人生の基礎を定める」という建学理念のもと、生徒たちは勉学に励んでいる。「第二父母」という活動では、教員も第二の保護者として生徒の悩みを聞くことに勤しんでいた。全校生徒が約 7800 人の同校は、キャンパスも 17.6 万㎡と広大であり、訪問団はバスで校内を移動した。

第 5 日　学校訪問・文化遺産見学(寧夏回族自治区)

6 月 16 日午前、一行は 5 校目となる寧夏特殊教育学校を訪問した。同校は、聴覚・視覚障がいの児童生徒を対象とした全寮制の学校である。教育目標に、「児童生徒が何か 1 つ技術を身につけ、社会で活躍できること」を掲げ、賀蘭石彫刻やマッサージ技術などの専門技術を身につける授業が充実している。また、音楽やダンスの授業にも力を入れており、一流の講師が教えているため、コンクールや大会などでよい成績を収める児童生徒も数多い。音楽の授業見学では、同校の児童生徒による楽器演奏と歌の披露に加え、訪問団も「茉莉花」と「さくらさくら」を歌い、音楽で交流を深めた。

昼食は、寧夏の名物の羊肉を使って作られた水餃子を食べきれないほど堪能した。昼食後は、銀川市内から約 1 時間半バスで移動し、紀元前 8 世紀頃から 1000 年以上続けて造られたという岩画を視察した。乾燥地帯に聳え立つ岩山と、原始的で素朴な絵を見て、訪問団は心を躍らせた。続いて、11 世紀から 13 世紀に栄えた西夏時代の王陵を視察した。現存する 9 つの王陵のうちから、初代皇帝である李元昊(景宗)の 3 号陵を見学した。三角形のような見た目から東洋のピラミットとも呼ばれている。訪問団は中国の歴史の壮大さに感動した。

第 6 日　学校訪問・外灘見学（上海市）

6 月 17 日早朝、訪問団は最後の目的地、上海へと飛び立った。上海到着後、一旦ホテルに立ち寄り昼食をとった後、午後は 6 校目の訪問校である浦東新区洋涇実験小学校を訪れた。同校の校長の陳岩泉氏は、元バスケットボール選手で、スポーツに力を入れている。毎学期、スポーツカーニバルと呼ばれる運動会を 2 週間開催し、児童の協調性を養っている。また、校内には、ガーデンファームやタブレット端末専用教室などがあり、先進的な取り組みも実施されていた。教育交流会では、児童によって、書道や少数民族の舞踊などが披露され、伝統文化教育にも力を入れていることがわかった。

その後訪問団は、近代上海を象徴する外灘を見学した。租界時代の西洋建築が並び、対岸にはユニークな形のテレビ塔や高層ビルが立ち並ぶ。訪問団は、各々で外灘を楽しんだ。

第 7 日　上海市内視察

6 月 18 日は、上海の文化施設や庭園を見学した。午前中は 2010 年の上海万博時の建物を利用した大型美術館、中華芸術宮へ向かった。「清明上河図」などの迫力満点の CG 映像作品をはじめ、中国の近現代美術など数多くの作品が展示されており、見ごたえのある美術館であった。

午後は、伝統的な上海を感じることができる豫園を訪れた。到着後は、豫園を散策したり、小龍包を味見したりした。また、参加者の中には、科学博物館まで足を延ばす者もあり、集合時間まで各自自由に過ごした。夕食は、上海の繁華街、南京西路にある人気レストランで、中国最後の夕食を楽しんだ。

第 8 日　帰国

6 月 19 日早朝、参加者たちは上海浦東空港に向かい、空港にて解散、各帰国地に合わせて成田、大阪、福岡の各空港へ向かって帰国の途に着いた。

2.
表敬訪問
歓迎会

中国教育部［北京市］
中国教育部歓迎会
寧夏回族自治区教育庁［銀川市］
寧夏回族自治区教育庁歓迎会

訪問団は中国の首都の北京市にある中国教育部と寧夏回族自治区の省都・銀川市にある寧夏回族自治区教育庁に表敬訪問をした。教育部では、2016 年 1 月に開催された第 1 回日中韓教育大臣会合後における日中教育交流の取り組みなどについて説明を受けた。教育庁では、寧夏回族自治区の経済的遅れの原因は教育にあるとし、政策の重点を教育においていることや、民族教育などの地方特有の教育施策にも言及があり、中国の教育についてさまざまな側面から理解を深めることができた。

中国教育部

［北京市］　6 月 13 日(月)

中国教育部は1998年3月に旧国家教育委員会が改称されて置かれた中国の中央政府の組織である。中国の教育全般を総括し、日本の文部科学省にあたる。教育の基本方針・政策、諸基準を制定し、中央各部委員会および地方を指導する。

プログラム第 2 日目の 6 月 12 日、日本教職員訪問団一行は中国教育部で表敬訪問を行った。訪問団に加え、在中国日本国大使館から、参事官の横井理夫氏と一等書記官の菊池信太郎氏も同席した。

1.　中国教育部あいさつ

中国教育部の出席者

国際協力交流司副司長 陳盈暉氏
基礎教育一局処長　高学貴氏
教師工作局処長　黄偉氏
国際協力交流司高級プログラムオフィサー
　顧秋利氏
国際協力交流司プログラムオフィサー
　孫家寧氏
　王鉄輝氏

陳氏より、上記の出席者の紹介のあと、日中の教育交流について話があった。内容は以下の通りである。

先日、6 月 6 日に文部科学大臣の馳浩氏が中国を訪問し、大学教授や学生と交流した。現在両国では、ハイレベルな教育分野での交流、留学生交流、言語教育など様々な方面で著しい成果をあげている。2016 年1月 30 日に韓国のソウルで開催された第1回日中韓教育大臣会合では、3 国間のイノベーションの人材育成、サッカーを含めた学校スポーツ交流等、日中韓 3 カ国連携で交流を深めるということで一致した。

また、中国教育部は、日本の文部科学省との間に、日中教育交流 5 カ年計画を結んでいる。そして、この日中教職員交流はその中の一環であり、2002 年から今まで 1588 名の中国教職員が日本を訪問し、日本の教職員は 300 名余りを中国に招待している。このプロジェクトは十数年にわたって、相方が互いに基礎教育について理解しあい、そして学び合うことに積極的な役割を果たしてきた。教育交流は国と青年たちの未来を担っている。イノベーションは発展の原動力であり、このプロジェクトもこれから新しい内容を増やして、両国の教育交流、そして両国の関係の発展にも役割を果たせるように祈念している。そのための次の 3 つの希望を伝えたい。

① 日中韓 3 カ国連携のプロジェクトに皆様が積極的に参加すること。今回の訪問校とも芸術やスポーツの各分野で交流をしてほしい。

② 青少年交流事業では、1000 人の中国の高校生が 4 回に分けて訪日する。受け入れの学校を募集しているので、積極的に彼らを迎えてほしい。

③ 現在中国では、学校スポーツの向上を目指しており、日本のスポーツ教育を学びたい。積極的に学校スポーツについて共有してほしい。

これから一週間、少数民族自治区の寧夏回族自治区、東部の一番発達した都市上海で、異なる地域の学校を訪問し、中国の基礎教育の発展を理解することができると思う。今回の訪問は短いが、教育交流は持続的に続くものであると信じている。

その後、陳氏は、日本の文部科学省初等中等教育局にあたる基礎教育一局の高処長を紹介し、訪問団の訪中に対して感謝の意を述べた。

2. 中国の教員育成について説明
教師工作局処長 黄偉氏

教員の育成は 175 校の師範大学と 390 校の総合大学で実施している。毎年 63 万人以上の学生が師範大学を卒業する。師範大学の教員育成課程では、教養科目、専攻科目、教授法の 3 つの分野に分かれており、1 学期間の教育実習が必要である。また、小中学校の教員になるには、それらに加えて、全国で実施している筆記試験と面接試験を受験する必要がある。内容は師範大学の課程と同じく、総合科目、指導技術、授業法の 3 つである。面接では、教員の実践能力をみている。2010 年に中国中央政府が出した教員育成政策により、教員免許更新のためには、5 年間で 360 時間の研修を受けることになっている。内容は、教員のインターネット能力や授業の ICT 能力を重視する研修になっている。

3. 質疑応答

Q. (日)日本の教育は平素公平であるが、中国の義務は皆特色化を目指しているのか。

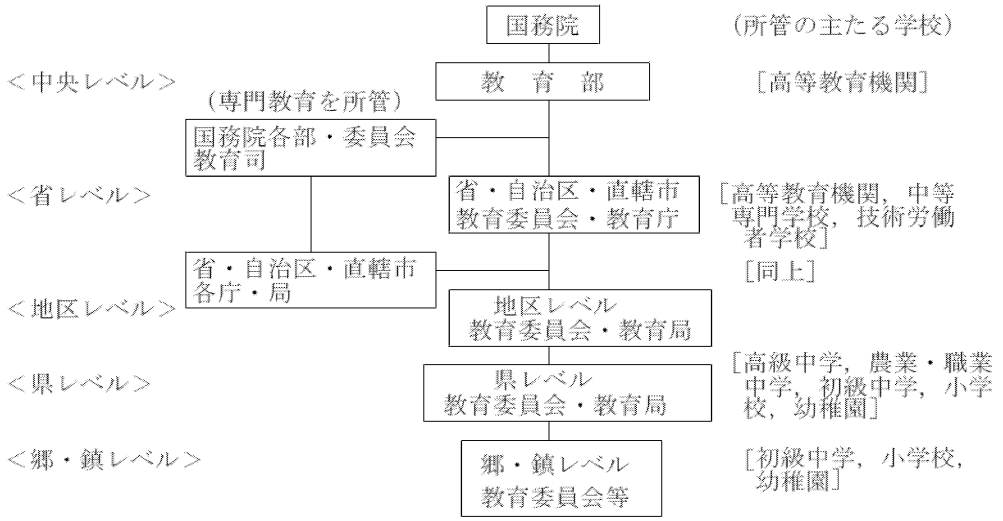
A. (中)全国の義務教育では素質教育を行っており、音楽、美術、体育は必修である。北京実験中学はその他に専修科目などコースが 100 以上あり、特色的な学校である。地方によっては異なり、農村の学校は必修基本教科のみである。義務教育課程(小・中学校)では教育の平均化を、高校は特色化を重視している。

Q. (中)日本にはどんな標準科目があるのか。

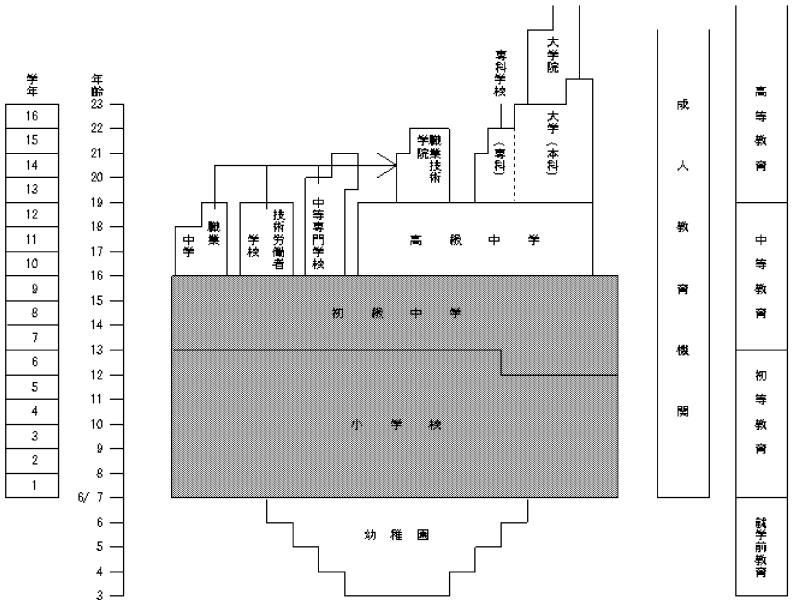
A. (日)小学校の課程は基礎学力 8 教科、1、2 年生には社会、理科を生活科として指導し、5、6 年生には家庭科を指導する。道徳は週 1 時間、全学年で指導される。特別活動も同様である。現在、5、6 年生には、外国語(英語)活動も行われ、話す、聞くを重視し、中学校の学習につなげている。3 年生以上は総合的な学習の時間がある。これは各学校により特色化が可能で、環境や福祉教育(ユネスコスクール含む)など

◆ **中国の教育行政について**

現行の教育行政系統



◆　**中国の教育系統図**



行う。建物に関してはすべての教科の教室がある。プール、運動場も持っているが、県の予算によって異なる。1クラスの児童生徒数は、35名としている。

A.（日）中学校は 5 教科が主要教科目である。技術・家庭科、体育、音楽、美術で 9 教科目学ぶ。そのほか道徳、特活、総合的な学習の時間、学活（LHR）放課後の部活（生徒児童による選択）が行われる。

Q.（日）広い中国で教員の質を高める研修をどのように実施しているのか？

A.（中）中国中央政府、省、市の 3 段階で研修を実施している。教員の管理、育成は地方政府の役割。発展途上の地方に対しては中央政府から補助を出している。

Q.（中）日本の小中学校で教員を育成する時はインターネットを利用しているか？どのようにして育成しているか？

A.（日）福岡県では交通の便が良いので、オンライン研修は無い。鹿児島県では島が多く、集まるのが困難なので、インターネットを使っての研修が実施されている。免許更新講習ではインターネットの講座がある。

Q.（中）日本では、オンライン講座はみんな真面目に受講しているか？

A.（日）オンラインの講座を受講後の試験は難しい。

Q.（日）中国では 360 時間の研修を、真面目に受講しているか？

A.（中）教員の研修は単位、学習時間を記録している。60 時間の ICT 技術等の必修研修や、教員が自分の能力を高めるための選択研修がある。現在は、教員個人の選択を重視し、教師が自分の苦手分野を自分で判断し、その分野を重点的に研修できるようにしている。

Q.（日）中国の教員免許はどこが管轄し、実施しているのか。

A.（中）中国では免許更新研修は、校内、市内、県内、国家中央政府で実施され、テストで合格すると免許が更新される。

Q.（日）中国では 360 時間の研修を受けるために担当授業を自習にすることは無いのか？

A.（中）夏休みや冬休みの間に実施している。中国では受験が厳しいので、授業が自習にならないように、工夫している。

Q.（中）小中学校の学校数と教員になる条件は？

A.（日）小学校は約 2 万校、中学校は約1万校である。教員免許を取るのに試験はないが、採用試験はある。4 年生大学卒業が必要だが、幼稚園教諭、看護教諭は短大卒業でも可能である。教員の数は幼稚園約 10 万人、小学校約 42 万人、中学校約 25 万人、高校約 23 万人。

（壷井　宏泰・町田　登志子）

《参加者の感想》

宮下　哲夫・・・・・・・・・中国の子どもたちも日本の子どもたちもよりグローバルな人材として、互いに手を取り合っていく未来をつくるためには、まず教員間の相互理解、友好交流が必要であり、そのため、今回の訪問で中国の教育・文化について認識を深めたいと思った。

奥谷　貴子・・・・・・・・・中国が日本の学校と連携し、芸術やスポーツの交流を通して互いに学び合いたいと強く思っていることや、中国の教育理念としては、近年、特に「徳・知・体・美」の全面的な発達を重視していることが分かった。また、教員の力をつけようという中国の取り組みは、ぜひ日本でも取り入れてほしいと思った。

鎌野　慶子・・・・・・・・・中国教育部を訪問するという貴重な経験をさせていただき、互いの教育に対する取組が分かり大変勉強になった。また、中国がサッカーの強化を行っていることは知っていたが、教育部の方からサッカーの具体的な話が出たことが驚きであった。今回の中国教育部が希望されていることを加味し、11 月の中国訪問団の受入れについて、計画を立て、希望に添えるようにしていきたい。また、教員の資質向上のため 5 年で 360 時間の研修を課すことや教員免許の有効期限が 5 年間であることなど、全国の教員に対する育成計画が実行されていることを知った。

中国教育部歓迎会

[北京市]　6 月 13 日(月)

宿泊先のホテルにあるレストランで歓迎昼食会を開催された。

1.　中国教育部　陳盈暉氏あいさつ
　訪中に感謝する。今回の訪中を通じ、児童生徒、教員同士の友情が深まることを願っている。教育部の準備した中華料理を堪能してほしい。

2. 団長　宮下哲夫氏あいさつ
　お招きに感謝する。我々団員は中国の教育に関心を持っており、今回の学校訪問を楽しみにしている。現場を見て教員の話を聞き、中国の教育について学びたい。教育に国境は無い。日中の子どもたちがよりグローバルに成長するためには、教員同士が交流し相互理解を深めることが大切。貴国の文化や教育を理解したい。

3. 会食

4. 記念品の贈呈
中国教育局より瑠璃の置物を頂いた。
訪問団からは、九谷焼の花瓶を贈った。

（佐久間　みのり・對馬　俊晴）

寧夏回族自治区 教育庁

[銀川市]　6 月 14 日(火)

寧夏回族自治区は人口約 647 万人、面積 66,400 ㎢である。回族とは、イスラム教を信仰する中国少数民族の一つであり、同自治区の総人口の約 3 分の 1 を占め、中国国内の回族人口としては最も多い。また、寧夏回族自治区の経済発展のため、特に貧困地域の教育政策に力を入れている。教育庁舎は、昨年完成した新庁舎である。

1.　国際協力交流処　処長　孫忠銘氏あいさつ
　出席者紹介
2.　団長　宮下哲夫氏あいさつ
3.　副庁長　王建平氏による寧夏回族自治区の

教育事情の説明

2008 年に中国教職員訪日団も一員として日本を訪問した。その際に 16 校を視察し、日中両国の教育システムには共通点も多いと感じ、寧夏回族自治区へも来て欲しいと思っていた。訪日の際に日本の特別支援教育の充実ぶりに感心し、寧夏回族自治区では特別教育を障がい者の学校だけではなく貧困により学校に来られない子どもたちにも教育を広げた。中国は経済発展が 3 段階に分かれている。 ①上海や広東など沿岸部地域。②河南や河北など人口の多い中部地域。③貧しく、条件的不利な西北部。寧夏回族自治区は、条件的に不利な西北部にあり、経済的な遅れの原因は教育にあると考え、教育による人材育成に全力で取り組んでいる。教育システムも完備し、全国各地と比べ寧夏回族自治区の学力は平均点にまで到達した。教育のポイントは以下である。

ポイント 1)「教育のレベルアップ」 義務教育は無償。小学校入学前や高校は、政府から貧困家庭へ援助がある。寧夏回族自治区は以前、貧困により学校に入学できない子どもが多かったが、現在では、全ての子どもが入学できるようになった。2001 年には朝食と昼食の無料提供を開始した。

ポイント 2)「科目改革」 以前は基礎能力・基礎学力など教育結果を重視していたが、現在は、幅広く、過程や方法、感情育成、価値観の形成を重視している。児童生徒の個性発展を重視し、各学校は特色ある科目を設けている。これらを受け、教員育成、教育の情報化、教育理念の促進、評価制度改革に取り組んでいる。

4. 質疑応答（日→中）

Q. 学校の特色化についての具体例は？

A. 銀川市第二十一小学校では学校独自に 98 の科目を設置しており、児童の能力によって選択される。

Q. 民族を大切にする伝統教育にはどのように取り組んでいるか？

A. 少数民族教育を重視し、民族教育処を設けている。重点、優先、支援の政策があり、漢族の児童生徒よりも進学が有利である。また、回族の小・中学校がある。

Q. 少数民族の子は一般的な小・中に混ざって学ぶのか？また、宗教的な配慮は？

A. 漢族と混合で授業を行う（漢回一家）。飲食面では回族はイスラム教のため清真食堂を設け、民族を尊重している。

Q. 進学率を教えてほしい。

A. 幼稚園 71%、小学校 100%、中学 100%、高校 91%、大学 31.48%

Q. 教育長の考えは教職員にどのように伝えられるのか。教員が育つ良い成功事例があれば教えてほしい。

A. 政策を 5 年に一度作る。企画通りに進める→評価→弱点を抽出する→新たな政策という取り組み方。市から町へ指令され、監督者の派遣や施設をつくるなどしている。例：南部 3 区改善プロジェクト 32 万の児童生徒がプロジェクトを受け、王副庁長と学生一人ひとりがつながりをもって実施される。

Q. 評価制度とはどのようなものか、また、大学の入試改革とは具体的にどのようか。

A. 大学入試は人生選択の手段であり、基礎教育は大学受験のためにある。基礎教育を工夫すれば大学入試に対応できると考え、例えば国が決めた内容である大学入試で試験に合格するために、選択を増加する。理系と文系を分けるなど偏った学習はさせない。

Q. 銀川市第二十一小学校は 84 学級、4700 人と非常に規模が大きいが、学校を増やすという考えはないのか。

A. 学校 1 校の規模は大きいが、今のところ問題はなく、満足している。

Q. 教員の育成のための工夫は？例えば給料や表彰、研修などを行うかどうか。

A. 教員の意識、理念が大切。児童生徒を尊重するという意識の改革が必要。教員の意識改革がポイントである。

Q. 特別支援教育について。日本では様々なタイプの子どもたちがいる。中国ではどのような子どもが入学しているか。また、卒業後の就職進学状況はどうなっているのか？

A. 寧夏特別支援学校では、言語障がい、視覚障がい、肢体不自由の 3 タイプの児童生徒がいる。言語障がい、視覚障がいの児童生徒は歩けるので学校に入る。肢体不自由の児童生徒の通学は検討中であり、現在は週 2 時間の訪問授業を医療機関と学校が連携して実施している。知的障がいの児童生徒は入学していない。

5. 終わりのあいさつ
6. 記念品贈呈
　寧夏教育庁から各参加者に賀蘭山石の印鑑を頂いた。訪問団は、赤富士の会津塗の文庫を贈呈した。

（町田　登志子・佐久間　みのり）

《参加者の感想》

大坂　真央・・・・・・・・・寧夏の教育事情について詳しく聞くことができました。政府が教育に対してとても力を入れており、資金援助等も大きいようで、義務教育は全面的に無料であったり、家庭の収入によっては援助金がもらえたりするなど、様々な援助を受けることができることに驚きました。特別支援教育においても、日本の影響を受けており、日本での視察後は訪問教育が行われるようになったことを聞き、とてもうれしく思いました。今後の試みとして、医療と連携した教育を行いたという話がありました。①特別支援学校への入学(障がい種別や入学状況)について、②卒業後の進路及び就職率についての 2 点について、積極的に質問もさせていただくことができ、よい経験となりました。しかし、重度の知的障がいの児童生徒に対しての教育は全く行われていないことにショックを受けました。

米村　光生・・・・・・・・・中国政府も地方の教育には力を入れており、この教育庁は政府直轄であり、設備もすばらしかった。就学前から高校までハード面は整備されている。貧しい家庭もあり、「栄養プロジェクト」として、政府が朝食・昼食を無料で提供している。このことにより南部の農村地区も学校に行けるようになっている。
教育改革は 30 年前から行われており、結果重視型から学習方法、過程、評価などを重視するよう転換している。今後の課題は教員の育成、教育の情報化、学生の精神の育成、評価（入試）制度の改正にあるとしている。

柳川　あずさ・・・・・・・・・中国の教育水準は、上海などの東部が非常に高く、寧夏回族自治区などの西部が低い。したがって、現在、寧夏回族自治区教育庁が最も力を入れていることは“教育レベルの向上”である。そのため、教科をはじめとしたさまざまな改革を行っていることが分かった。

寧夏回族自治区 教育庁歓迎会

[銀川市]　6 月 14 日(火)

1.　寧夏回族自治区教育庁
　副庁長　王建平氏あいさつ
　これからも、中国・日本の教育界の交流を緊密にできれば最高であり、相互理解が深まっていくと思う。銀川での滞在はそれほど長く無いが、充実したものなるように祈念している。
2. 国連大学事務局長　古田知美氏あいさつ
　寧夏回族自治区教育庁の皆様には、寧夏回族自治区における教育制度の概要や教育の取り組みをご教授いただきまして、様々な質問に答えていただきありがとうございました。教育長の理念と政策に感銘を受けました。
　本日、ご教授いただいたことを踏まえて、今後、教育現場を視察させていただき、寧夏回族自治区の特徴と、中国の地方の教育の特徴を把握することを期待しています。また教職員や児童生徒との交流を通じて友好関係が深まることを楽しみにしています。
3. 歓談
　その後、寧夏回族自治区で造られたワインで乾杯をした。歓談では、両国の教育について、さらに質問が出るなど、より理解を深めた。

（壷井　宏泰・對馬　俊晴）

3.

学校訪問

北京師範大学附属実験中学校
銀川市第二十一小学校
銀川市第二十四中学南校区
寧夏育才中学
寧夏特殊教育学校
浦東新区洋涇実験小学校

北京師範大学附属実験中学校（高等学校）

[北京市]　6 月 13 日(月)

学校長：蔡暁東（CAI Xiaodong）
設立年：1917 年
児童・生徒数：約 2900 名
（中学約 1200 名、高校約 1700 名）

文化教室（書道などを学ぶ）

2017 年 100 周年を迎える歴史ある学校。高等学校（本部）と中学校（分校）を設置。体育衛生活動も重視しており、北京市の女子バレーボールチームと陸上のフィールド競技の伝統校でもある。体育教育においても改革を行い、必修＋専修の構造で体育教育を実施。校内に 50 メートルプールを設備。「人を以て基本とする。社会奉仕、発展と卓越の追求」という建学の精神は、教師や生徒に根付いている。国際交流も活発に行っている。

1. 施設見学

体育館：地下に 50 メートルプール、1 階にダンスルームや体操室、2 階にバスケットボールなどができるスペースがある。5 月から 10 月水泳の授業を行い、10 月から 4 月はバスケットボールなどの授業を行う。

成長指導センター：心理的なケアを行いながら成長を促進させるためのセンター3 階建て 2014 年築。

カウンセリングルーム：国から特色ある学校の栄誉を受けた。生徒の学習以外の面を指導する。生徒の中には、生徒同士の人間関係、親との関係、成績の低迷、またそれらによる不眠など、様々な悩みを抱えている生徒が多い。それらのカウンセリングをする場所となっている。また、教室として使用し、100 名ほどが心理などの授業を受ける。

実験サロン：衣装などがあり、着用できる。気持ちを落ち着かせたり、プレッシャーから開放させたりする。

高校3年生用専用校舎：6 階建て 90 年代築。大学受験に専念できるように、高校 3 年生専用の建物がある。

芸術室：コレクターの方からの寄付による貴重な展示品が多数展示されている。博物館で展示品をみるよりも、学生たちに本物の作品に近くで触れてもらうほうが、価値があるという思いがある。三国時代の物品などの展示もあった。また、生徒の作品を定期的に入れ替えながら展示。理系の生徒の作品なども展示されていた。

教科書：国語は、学校独自の教科書を使用する。その他科目は、中国教育部選定の教科書を使用している。

授業料：1人当たり年間 600 元

2. 会議室にて座談会

○校長補佐　郝智勇氏あいさつ

　みなさんようこそお越しくださいました。中国教育部に最も近い場所に2つの学校があります。先日も、日本の女子高校と交流を行いました。日本の学校に対してとても興味を持ちました。本校は、1917 年に創立し、中国の中でも最も特色のある学校です。100 年前に北京師範大学附属女子中学として開校し、中国全土から女子生徒が入学しました。当時、女子の地位は

低く、教育を受ける機会が少なかったため、珍しい学校でした。他の学校と比べ民主的で、自由かつ、女性のもつ影響力も大きかったので、1949年中華人民共和国建国後、多くの中国の指導者の娘たちが入る学校となりました。1968年に男女共学となり、現在は、北京市内で第 3 位内、全国で第 5 位内の進学校です。先生たちのプレッシャーも大きいが、その分誇りを持っています。

また人材育成の三つの要点は、以下です。

①理数科生徒の育成－コンピュータ・生物の試合に参加する。コンピュータ技術の面での発明など

②スポーツ・技術面の育成－水泳チーム、スポーツ面の育成

③国際人材の育成―卒業生の3分の2は中国国内の大学へ進学し、3分の1が海外へ留学し、そのうち、90%はアメリカ、10%はヨーロッパ・カナダに留学する。京都大・早稲田大学への留学も多い。

○団長　宮下哲夫氏あいさつ

私たちは日本各地の学校より集った 25 名の教職員です。今日は、初めての学校訪問です。郝先生からお話を聞かせていただき、学校の様子がよくわかりました。様々な先生方の協力に感謝いたします。

3. 記念品の贈呈

訪問団から博多人形を贈呈した。

訪問校からは、京劇の屏風の贈り物を頂いた。

（芳賀　裕美・肥塚　友子）

《参加者の感想》

芳賀　裕美・・・・・・・・・北京の中心地にある有名な進学校であり、まず施設の充実が目をひいた。体育館や地下のプール、芸術室など、あらゆる場面で生徒が活躍できる環境が整っている。また、学生成長指導センターといった施設では、若いカウンセラーが何名も常駐し、生徒の心のケアにも力を入れていた。日本でも最近では学校カウンセラーが常駐するようになってきたが、ここまで力を入れることはできていない。そういう面では非常に見習うべきところであった。学習面、生活面など多方面から生徒の学校生活を支えている様子がわかった。校長先生からのあいさつでも、学校に対して自信と誇りを持っていることが感じられ、それが学校全体の気風となっているように感じた。

鎌野　慶子・・・・・・・・・行き届いた教育環境に驚いた。特に施設面では、運動施設（体育館、プール、舞踊室等）、カウンセリング室、美術室など、生徒が落ち着いて学習できる環境が整っていた。90 年代までは、北京ナンバー1 の学校であったこと、現在も全国 5 位であることが頷ける。保護者からの教育に対する期待も高く、大変であることを伺い、日本と同様であると感じた。学力のみに特化するのではなく、スポーツや芸術、国際人材の育成も目指していることが印象に残った。

對馬　俊晴・・・・・・・・・進学実績は北京で 3 位、中国全土でも 5 位内に入るというトップクラスのエリート養成校であり、施設、設備はもちろん、中国の文化・歴史教育も充実している。単に知識習得だけではなく、創造性・独創性を育む教育も重視されており、エリート層は世界で活躍できる教育になっている。中国国外でのやりとりができる教育になっているようで、画一的な教育ではないことに驚いた。

銀川市第二十一小学校（小学校）

［銀川市］ 6 月 14 日(火)

学校長：馬恒燕 （MA Hengyan）
設立年：1903 年
児童・生徒数：約 4700 名 / 教員数：222 名

カップダンスに挑戦する日本教職員

「塞上湖上」といわれる銀川市にあり、100 年以上洗練された教育実践を行っている学校である。「児童の未来の発展の基礎を築くこと」を理念とし、国際ビジョンを持つ生徒の育成を目指す近代的な学校である。キャンパスは今年秋に 1 つ増築され、合計で 3 つになる。

1. 校内見学

○竹ダンスで歓迎してもらった。訪中団も一緒に竹ダンスを教えてもらいながら、一緒に児童たちと楽しんだ。

○興趣楼を見学

特色のある97 科目の多くをこの建物で実施。クラス数は 61 クラスで 25～30 名の人数制限がある。ヨガ教室や3D 印刷教室、科学技術、映像教室、閲覧室、民族教室などがある。軍事体験室もあり、軍人（保護者）が来て、基礎的なことを教えてくれる。タブレット端末専用教室には、100 台のタブレット端末がある。音楽教室は、全部で7教室あり、見学中は、巴烏（バーウー）という民族楽器の演奏をしていた。また、カップを使ったリズム音楽を見学し、児童と一緒に授業体験もした。

2. 座談会

○あいさつ　副団長　河田重吉氏

銀川市第二十一小学校を訪問する機会を頂き、ありがとうございます。スーパースター（星星少年）制度という制度に、とても強い印象を受け、すばらしいと思いました。今日は、竹ダンスから、様々な授業を見させていただき、カップダンスを私も楽しませてもらいました。私たちのほとんどが、銀川市の訪問を一番楽しみにしていました。今日は、大変にありがとうございました。

○あいさつ　学校長　馬恒燕氏

1903 年に創立し、100 年以上の歴史をもつ学校です。寧夏回族自治区教育庁直轄の学校で、本部は本校で、分校は南西部にあり、今秋、新しい分校を賀蘭県に設ける予定です。本部の教員が 129 名で児童数は2800 人です。自分たちの学校目標に沿って、学校教育を行っています。「感恩」というのが、各科目の中に取り入れている大切な項目で、親や国に恩を感じるということを授業の中で教えています。

国の規定に沿って、週 30 時間の授業時間の内、選択科目は 2 時間。金曜日の午後が選択科目に当てられます。

○質疑応答（日→中）

Q. 制服について　スカーフは優秀な生徒に与えられるのか。

A. すべての児童が同じスカーフを使用する。

Q. 選択授業の時間は週 2 時間、年間 40 時間はどのように確保されているのか。

A. 週 5、6 日で 30 時間の授業時間のうち、28 時間は国に定められた授業科目を指導する。残りの 2 時間は選択授業に充てている。

Q. 特色のある科目を選択しない児童はいるか？

A. いない。

Q. 人気があって入れないクラスがあったり、逆の場合などはあるか？

A. インターネットを通して前々から宣伝し、自分の選択したい科目があれば、早めに申し込む。人数の関係で入れない場合は、第二、第三希望にまわる。

Q. 高校で音楽の教員をしており、とても興味深く参観させてもらった。民族楽器の名称は何か。大きな音がでるがどうやって指導しているのか。

A. 巴烏という楽器で、雲南省や広西チワン族自治区の傣族の民族楽器。

Q. 巴烏は学校の楽器か。値段は。

A. 児童が買う。180 元、品質のよいものは 240 元。

Q. カップダンスは民族ダンスなのか？

A. 民族音楽ではなく、リズム感を養う音楽ゲーム。

Q. 音楽の教員だが、歌、楽器演奏を子どもたちがとても楽しそうにしていて、すごいと感じた。音楽の楽しさを子どもたちが感じること以外で、子どもたちにつけさせたい力は何か。

A. 音楽を愛する眼差しの育成。社会人になっても通用する審美感を身につけさせたい。

Q. 日本では全ての学校には校歌があるが、校歌はあるか。

A. 今はない。子どもにふさわしい歌だったらあればよいと思う。毎週月曜に国旗掲揚の際には、国家を歌う。中国の全ての小学校で中国少年先鋒隊歌という歌をよく歌っている。

Q. 特色のある授業での教科書の選定基準は？

A. 教科書はない。週 1 回しかないので、1 週間の間に先生がインターネットなどで調べて、どんな授業にするか考える。

Q. 今後の課題は何だと考えるか。

A. 創造力。創造力を育てるために、リサイクルのビンや 3D のペン描いて作品をつくるなどの体験活動

を行っている。子どもの潜在能力を開発できるようなゼミのような形で授業を行っている。

○団長　宮下氏よりあいさつ

日本でさまざまなうわさ、たとえば子どもたちがつけるスカーフにまつわる話などを聞いていたが、実際にお話を聞けて、そうではないということを知り、実際に知ることの大切さを知りました。日中友好という言葉を習字で書いていただくなど、交流する機会ももてました。日本で日中友好を広げていきたいです。

3. 記念品交換

訪問団は博多人形を贈呈した。

同校からは漢詩の巻物を頂いた。

（町田　登志子・芳賀　裕美）

《参加者の感想》

河田　重吉・・・・・・・・・寧夏回族自治区での最初の訪問校。竹ダンスで歓迎してもらい、一緒になって踊ったり、カップを使ったリズムダンスで一緒に活動したりして、楽しかった。今回のプログラムで英語があまり通じなかったが、小学生を初め、子ども達が話せるのは今後楽しみである。ここだけではないが、3D プリンターが各学校に設置されているのには、大変驚いた。

町田　登志子・・・・・・・・・児童の自然な笑顔が印象的だった。特別教室などの設備も充実していたが、設備と学習内容と児童の質がマッチングしており、自然な印象を受けた。廊下の掲示物などもかわいらしい。

肥塚　友子・・・・・・・・・子どもたちによる竹ダンスで歓迎していただいた。様々な跳び方を披露してくれ、どの子も生き生きと跳んでいた。リズム感がよく、跳べない子が一人もいないことにも驚いた。ヨガや 3D 印刷、民族音楽など 97 科目も特色ある科目が用意されていた。子どもらの興味・好奇心を満足させるのに十分な科目数が用意されていることに、熱心さと、型に嵌らない自由さを感じた。カップを使ったリズム音楽を参観させてもらった後、子どもたちに教えてもらいながら、わたしたちも体験させてもらった。和気藹々とした雰囲気の中、子どもたちが伸び伸びと楽しんで歌ったり、体を動かしている様子が印象的だった。都市部のみならず、自治区においても PC など学校設備が充実し、教室や建物も美しく、学習環境が整っていることに驚いた。中国がどれほど教育に力を入れているのかも感じられた。保護者とのやり取りもメールやインターネットを使用し行っているとのことで、ペーパーレス化や効率化も図れる。よい所は積極的に何でも取り入れようとする姿勢を随所で感じた。旧態依然としたところがまだある日本の学校教育と比べて、参考にすべきところはたくさんあると感じた。

銀川市第二十四中学南校区（中学校・高等学校）

[銀川市]　6 月 15 日(水)

学校長：于全高（YU Quangao）
設立年：1958 年
児童数：1429 名　教員数：103 名

生徒とバトミントンをする日本教職員

設立当時は「銀川鉄路中学校」という名称であったが、2003 年に「銀川第二十四中学南校区」に変更された。敷地面積が 4 万㎡、蔵書が 42020 冊である。設備の充実した建物、運動場、体育館、図書館、コンピュータ室、物理、化学、生物の実験室があり、高解像度の AV ルーム、相談室、地理歴史教室も整備されている。同校は国家レベルの「グリーン学校」、全国「言語文字規範学校」、自治区レベルの「精神文明校」、「道徳教育模範学校」、「読書推奨校」、「愛国主義教育模範学校」、「安全模範学校」などの名誉を与えられている。

1. 校内見学

○生徒全員のラジオ体操を見学。午前中 4 時間の授業の中で、2 時間目と 3 時間目の間(9:05～9:35)に設けられている 30 分のラジオ体操の時間では、ほとんどの生徒がラジオ体操を行っているが、一部運動部に所属する生徒は、その競技の練習を実施してい

る。また、当番制で、一部の生徒が教室等の清掃を行う。「縄跳び」も部活動として存在。自治区ではトップレベル。運動部は主に体育担当の教員が担っている。各教員も部活動顧問を担当し、授業時間以外の時間に活動している。例えば、数学の教員でも物理・化学・生物の部活動を持つこともある。

○緑化運動はあまりしていない。整備中。

○同中学校からは、同高等学校への進学率は 30%程度。

○音楽室を見学。

○階段式会議室を見学。通常、教員は各研究室にいるが、2 週間に 1 回程度の職員会議で、この会議室を使用する。政治活動や校長からの伝達等を行う。生徒は通常は使用しないが、英語スピーチコンテストや朗読、国語の劇などで使用することもある。

○充実した理科実験室を見学。設備は充実している。物理分野での力学、電磁気学ごとの実験室が完備されている。化学教室では、テーブルごとのドラフト(有害なガスを廃棄するダクト)を備えるなど、日本の学校には見られない充実したものになっている。理科教員が教える生徒数は、中学校では 14 人、高等学校では 13 人。授業は、1 日当たり 8 時間、5 日間で 40 時間。理科は 1 年生では週 5 時間、2・3 年生では週 4 時間実施。

○図書室の蔵書は 4 万冊で、貸出可能。一人当たり 30 冊分を有している。専門の司書を配置。生徒・教員の読書歴を管理している。

○書庫がある。同校教員が作成した教科書も所蔵している。同校の学校用教科書も編纂している。

○図書館では、不登校気味の生徒の対応をすることもある。

○PC 室は、3 教室×64 台 PC を完備。

○心理関係のカウンセリング室が充実している。全国統一学力テスト前の利用が多い。箱庭療法・心理分析の教具が充実。

○地理と地学が融合した教室も設置。展示されている教材も充実。天球版が天井に設置。

○書道専用教室も存在。

2. 座談会

校長　于全高氏あいさつ・学校紹介

中学部と高等部があり、両方合わせると教員数は 203 名、生徒は 2849 名いる。中学部と高等部の管理は別々。教員の学歴は全て大学卒業以上である。

副団長　河田重吉氏あいさつ

中国語でのあいさつのあと、「百聞は一見にしかず」と言われる通り、理科室等の設備には驚いた。2 時間程度の短い訪問だが、有意義なものにしたい。

3. 質疑応答(日→中)

Q. 理科の実験室が非常に充実しているが、学校全体の予算はどれくらいなのか？

A. 教員の給料、光熱費を含めて毎年 3000 万元である。別に大きな予算が必要な場合は国に申請する。

Q. 日本では年間で 30 日以上欠席する生徒が、中学で 2～3%、高校で 2%いるが、この学校ではどのぐらいか？

A. 長欠者は 0%、1～2%転校する生徒はいる。中学校は夏休みが 7 週間、冬休みが 4 週間、その他に祝日もある。イスラム教の祝祭日も休み。

Q. 日本の高校では 1.8%の生徒が年間 30 日以上休む。また 1.8%の生徒が中退する。この学校はどれぐらいか？

A. ほとんど無い。でも対策はする。学校を休むには届けを出さなければならない。

Q. 心の病気で年間 30 日休む生徒はどれぐらいいるか？

A. すごく少ない。親と相談して 1 年間休学することはある。新学期に復帰する。

Q. 教員は 1 校につき、何年勤めることができるか？

A. この学校の教員採用方法は 3 つある。大学院生は直接、有名師範大学卒業生も直接、その他は全国の範囲で採用。原則定年まで勤務できる。転勤は無い。中学部の張先生は 35 年この学校で勤務している。

Q. 数学で特色のある取り組みはしているか？生徒は英語を楽しく話をしているが、スピーキングの取り組みはどのようにしているか？

A. 自治区特級教師として、生徒の積極性、事前準備、授業方法を大切にしている。英語も同じ、教員の人格や魅力も大切。

Q. 学校が新しくなり設備が充実したことで学力が上がったか？地域の方々が学校を見る目は変化したか？

A. 設備ではなく、教員のレベルが大切。教員の育成、管理。

Q. 教員の男女比は？

A. 女性の教員の割合は、小学校で 90%、中学校で

70%、高校 50%。

Q. 今日は専門教室でほとんど生徒を見なかったが、専門教室はどれぐらいの頻度で使われているか？

A. 現在、期末テストに向けて復習の段階。また、中 3 は進学テスト対策で筆記の対策をしているので使用していない。頻度はわからないが、必要な時に使用している。

Q. 教員の評価はどのようにされているのか？給与に影響があるのか？評価の基準は？

A. 人事評価は毎学期やっている。すべての教員に対し面談を行い、指導姿勢、規律、進学率、論文、研究課題などに基づいて総合評価する。

3. 記念品の贈呈

訪問団は博多人形を贈呈した。

訪問校からは「孫子の兵法」という書簡と名家字画を頂いた。

4. 記念撮影

（對馬　俊晴・壷井　宏泰）

《参加者の感想》

高倉　洋美・・・・・・・・・この広い中国の、地方でも都市部と同じような学校施設があり、このような熱心な教育が行われていることに驚かされた。女性教員が多く、女性の高地位が確立されておりなおかつ、職員同士の笑顔でのコミュニケーションを取る姿ばかりで、雰囲気がとてもよく感じられた。生徒数の多さにもさることながら、職員も 200 名を超えると聞いたが、そんな中でも、このような雰囲気で、互いの授業研究とを行うなど切磋琢磨する姿は、私たちも見習わなければならないと思った。この学校の校長先生がおっしゃっていた、「教師のレベルアップがとても重要」という言葉が印象的であり、自分自身ももっとスキルアップしなければならないと反省させられた。

徳橋　佑哉・・・・・・・・・都市部と地方の教育格差是正のため、地方にも師範大学卒業者や大学院卒の教員を積極的に採用していた。理科の実験室が充実しており、1 つ驚いた点があった。化学室において、ドラフトチャンバーが各個人の机に設置されており、ちょっとした気体実験も各個人での実施が可能であった。日本では、許可されるのか不思議なところである。教員の育成も大事にされており、教員のやる気をいかに引き出すかが鍵であると言われていた。日本と同じく、生徒の心に火をつける教員が大事ということだろう。

壷井　宏泰・・・・・・・・・理科の設備の充実ぶりに驚いた。まずは、生徒用の各実験の机に簡易型のドラフトがあったことだ。日本では人体に有害な気体発生の実験でも少量であれば、窓の換気に気を付けて実施してしまうが、簡易型のドラフトがあれば、より安全に実験をすることができる。次に、天井に設置されたプタネタリウムや、年間の実験一覧が掲示されていることなど、先進的な設備、取り組みを知ることができた。最後に最も驚いたのは、教員1人あたりの生徒人数が、中学で 14 人、高校で 13 人と法律で決められているということだった。日本では教員1人あたりの生徒人数が 40 人なので、その差は歴然である。

寧夏育才中学（高等学校）

[銀川市]　6 月 15 日(水)

学校長：陽静（YANG Jing）
設立年：2006 年
児童数：7800 人　教職員数：555 人

自治区の教育庁による「貧困緩和校」。名前は「中学」だが、実際には高等学校である。寧夏回族自治区南部地域の貧困地域からの生徒を全寮制で受け入れている。「知識が運命を変える、品行は人生の基礎を定める」をモットーにしている。寮も敷地内にあるため、非常に広大なキャンパスである。また、規模の大きな学校のため、副校長は 5 名いる。

副校長丁梅栄氏に学校を案内していただいた。この寧夏育才中学校は、「中学」という名称ではあるが実際は「高校」であり、今年 10 周年を迎えた、貧困地域である寧夏の南部 3 区の子どもたちのための学校である。全寮制で学費・寮費・雑費が無料となっている。これまで 3 万人以上の生徒が補助を受けており、そのおかげで経済的理由の退学者はいない。ほとんどの生徒は大学に行くが、進学の希望がなければ技術系の学校に進ませ社会人になり自活できるようサポートしている。生涯発展指導や学業発展指導、生活技能指導に力を入れている。

学内は広く、見学のためにバスで移動した。生徒に案内してもらい、学生サークルや部活を見学した。約 60 のサークル・部活があるそうである。合唱、ダンス、文芸、3D プリント、書画、手工芸などを見せてもらい、生徒と交流した。サークル、部活とも参加すればどちらも単位がもらえるそうである。サークルは必須ではないが、単位取得のためほぼ全員が参加しているとのことであった。

＜座談会＞

1.　副校長朱文璋氏　あいさつ

この学校は、貧困から脱出するための義務を負っており、「知識で自分の運命を変えよう」をモットーにしている。まず学生の品格教育を重視し、価値観や人生観を育成し、そして人間関係をうまく処理する能力を身につけさせることを目的としている。

全寮制のために、様々な指導をしているという。教員が第 2 の父母として、生徒と向き合っている。国家レベルの研究も行い、教員も積極的に改革を行っている。これまでに 1 万人以上の卒業生が出ているが、全国の大学に入学をしている。これらの生徒はすべて貧困家庭から来ているが、大学を卒業すれば、自分のみならず家族の運命を変えることもできる。そういう気持ちをもって、生徒も頑張っている。

2. 団長宮下氏　あいさつ

お招きいただき感謝しています。私たちは、日本各地から集まった教職員で、中国の教育に非常に興味を持っており、ここに来るまでもいろいろなお話を聞き、義務教育の無償化、給食など様々な面での努力を感じた。実際にこの場に来て、素晴らしい施設、やる気のある教員などを見て、有益な人材が育っていると実感した。これからは、寧夏の子どもと日本の子どもが手を取り合ってグローバルに活躍する。今日のこの場が、その道しるべとなるようにしたい。

3. 質疑応答（日→中）

Q. 入学時の自己負担や入試の倍率は？

A. 補助金以外で、生活費・衣服・生活用品・交通費等合わせて1学期に1000 元ほど。南部3 区からこの学校への進学率は 10%。統一テストの結果で入る学校が決められるため、入試の倍率はない。

Q. 校長の役割や、特級教師とは？

A. 校長は学校全体の教育方針を決め、教育庁など上から下りてきたものの遂行。特級教師の資格は、中国で統一の基準がある。

Q. 奨学金は返済不要か、また、入学の際に所得制限はあるか？

A. 奨学金の返済は不要。入学時の所得制限はない。寧夏回族自治区の 8 県 3 区内で一定の入試得点が取れていればよい。ただし、貧困家庭でない場合は、助成金がもらえない。

Q. 大学進学時に学費はかかるのか？

A. それぞれの家庭事情によって様々。助成金を受ける子もいる。また、一部は継続してもらえる助成金もある。

Q. どんな教育をすれば真剣に自習に取り組む子になるのか？

A. 教員が第2の親として、生活・学習・心理全ての面で学生をサポートしている。常勤カウンセラーは 6 人いる。また、学校の雰囲気がそうさせているのではないか。「知識で運命を変える」という意識をもたせることで、学生が自発的、意欲的に取り組んでいる。先生方の教育理念も影響いているのではないか。

Q. 世間からこの学校はどう見られているのか？例えば「この学校は貧しい子が行く所だ」などとは思われていないのか？

A. 差別はない。学生たちの勤勉さを見て、南部3 区の子しか入れないので、むしろ世間の親たちはうらやましがっている。

4. 記念品贈呈

日本側から博多人形を贈呈した。

（芳賀　裕美・佐久間　みのり）

《参加者の感想》

對馬　俊晴・・・・・・・・・寧夏回族自治区南部の貧困地域の貧困緩和のために、人材育成を目的とした高等学校であるが、「知識で人生を変える」という指導方針の下、生徒たちがそのスローガンに応えるよう一生懸命学習に取り組んでいる様子に感銘を受けた。自分たちの将来だけではなく家族や地域を背負って頑張っている様子も感じられ、日本の教育において、いかに生徒を本気にさせられるか考えさせられた。

奥谷　貴子・・・・・・・・・貧困の家庭のために作られた学校であり、生徒も家族も貧困から脱出するためにがんばりたいと思っている。「知識で自分の運命を変えよう」ということで、教員も責任を感じながら教育活動を行っている。「品格の教育」ということで、人間間の問題をうまく処理する資質を高めることも大切にしている。教員は第２の父母であり、悩みや困難なことがあれば、無条件に手を差しのべる気持ちで生徒に接している。私の学校も全寮制なので、先生たちのこのような姿勢は大切だと改めて感じた。

佐久間　みのり・・・・・・・・・「知識が運命を変える、品行は人生の基礎を定める」という建学理念が強く心に残っている。貧困地域である寧夏南部 3 区の子どもたちに限定した全寮制の学校であり、実際には「高校」であることなど、日本のシステムにはない形の学校であることにまず関心をもった。この学校に通うことで、「南部 3 区のある村では清の時代以来、初めての大学生が誕生した。」との話を聞き、中国における経済格差問題の深刻さとこの学校の価値を感じた。見学時には、黙々と自習に取り組む姿、また、生き生きとサークルで活動する姿に感動を覚えた。教育を受けることによって人生を変えようとする子どもたちの意欲的な学びの姿を目にし、日本の子どもたちとの意識の隔たりを強く感じずにはいられなかった。

関根　朱美・・・・・・・・・全寮制で、生徒は貧困家庭の出身であると聞き、驚いた。選択教科の授業を参観した。生徒の関心意欲は高く、生き生きと授業に取り組んでいた。書道の教室で、交流をさせていただいたが、書を書いて頂いた先生が朱校長先生であったことを後で知り、驚いた。切り絵や刺繍など中国の伝統文化を継承する授業があり、興味を持った。

寧夏特殊教育学校

[銀川市]　6 月 16 日(木)

学校長：尹耀金（Yin Yaojin）
設立年：1985 年
児童数：242 人

聴覚障がいの児童生徒の授業の様子

全寮制の寄宿学校である。聴覚障がい、視覚障がいのある児童生徒を対象とし、電視大学専門課程のクラスもある。聴覚・視覚障がい義務教育、高校教育、中等職業教育、電視大学専門課程が一体となった教育体系で、寧夏回族自治区において、歴史や規模が最大の特別支援学校である。「すべては障がい児の現在と将来のため」という建学主旨に沿って、「知識で自分の人生を変える」というモットーのもと、基礎教育の上に、児童生徒に何か一つの技術を身につけ、社会で活躍できることを教育の目標として、教育事業を行っている。賀蘭石彫刻と視覚障害マッサージ専門の卒業生の就職率は 95%にのぼる。

総務担当の副校長の案内で、まずは食堂を見学した。ここは寮と直結しており、ハラル（清真）の料理が提供されている。毎日の食事代は 1 日 15 元だが、食事代として、政府から 1 人あたり 1 年間に 500 元が支給されている。また、政府の栄養計画の指示により、1 人あたり 1 年間に 1200 元が支給されている。それに加え、生活困難者には 1 人あたり 1 年間に 1125 元が支給されている。

次に、寮を見学した。4 人部屋、9 人部屋があった。2 階が女性、3 階が男性になっている。掃除は児童生徒が自分ですることになっており、非常に綺麗だった。

次にトレーニング棟 1 階のコンピュータによる発声トレーニング室を見学した。コンピュータで自分の口の

形と比較しながら発声を練習したり、手話のトレーニングをしたり、ゲームをしたりしながら自分にどのようなコミュニケーション能力があるのかを知ることができる。

次に 2 階の彫刻室を見学した。ここでは寧夏の彫刻の第一人者が指導にあたっており、学校を出たら社会で生きていけるような高度なトレーニングが実施されている。まず、賀蘭石の切断から始まり、電動ドリルによる加工、整形と続く。印鑑や硯等を約 1 週間かけて完成させるそうだ。

次に 3 階の書道教室を見学した。ここでは寧夏書道協会の理事が指導にあたっている。7 才から 20 才の生徒が受講中だった。「北国の春」の書を先生に書いていただいた。

次にイタリアで開発された教材を使ったトレーニング室を見学した。簡単認識、数学、言葉、科学技術等を遊びながらする認知トレーニングが実施されていた。

次に 4 階、発音の練習をしながら体を動かし、競い合うことによって言語や手話を習得する練習がされていた。

教学棟の 2 階に移動。ブラインド卓球を見学。球の中に鈴を入れ、その音を聞きながらボールの動きを認識している。

1 階で視覚障がいの生徒による「ランバダ」の合奏と、イギリスのピアノコンクールで優勝した生徒による「茉莉花」のピアノ演奏、「さくら」の合唱を披露してもらった。お礼に訪問団も「さくら」と「茉莉花」を合唱した。

次にダンス教室を見学した。聴覚障がいの児童生徒は床の振動や照明の変化、先生の指揮を見てダンスを踊る。小学校 1 年から 3 年で 1 週間に 2 回の必修の授業になっている。児童生徒によるダンスを披露してもらった。小学校 1 年生から 3 年生にしては体が大きいので不思議だなと思って質問すると、貧しくて学校に行けなくて大きくなってから入学した生徒は入学した年を小学校 1 年生とするそうだ。

その後、点字、数学、英語、コンピュータ、美術の授業を見学。マッサージの授業では実際に生徒にマッサージをしてもらうことができた。美術教育が充実していると感じた。

最後に、児童生徒が作った中国結びの装飾品をプレゼントしてもらい、同校の教職員や児童生徒たちと一緒に記念撮影をして訪問を終了した。

校長尹耀金氏よる補足説明

数学・英語・国語は視覚、聴覚障がいの児童生徒は全国の義務教育課程と同じものを利用。視覚障がいの児童生徒は専門用の教科書を利用。拡大教科書があるとのことだが弱視の児童生徒も展示の教科書を使っていた。個別指導あり。卒業後の就職 100%に力を入れており、福祉企業を招いての職業斡旋も行っている。教材、教具は市販のものを利用、完備している。視覚障がいの児童生徒は洗顔などの生活指導もこなっている。

担任はいるが全教科教えることはない。ダンス、絵画の指導は一流の教員が行っている。ダンスの発表を見学したが、天井にある照明の点滅と床の振動でリズムがわかるようになっている。

児童生徒の募集は自治区から。すべての希望するすべての児童生徒が入学可能で、他に 11 校の盲、聾唖の学校があるため、あぶれることはない。

カウンセリングルームが完備され、特に盲生が人間関係のストレスが原因で、利用することが多い。ホームシックの生徒は少ない。

（町田　登志子・壷井　宏泰）

《参加者の感想》

伊藤　陽一・・・・・・・・・障がいを持ちながらも、どの児童生徒も明るい表情で生き生きと活動していた様子が大変印象的であった。特に素晴らしいピアノを弾いてくれた生徒の演奏と、返礼に「さくらさくら」「茉莉花」の弾き歌いをした後、その生徒が握手を求めて来て、抱きついてきた時、言語は通じないが音楽は通じ合えると確信できたのは大きな成果であった。

大坂　真央・・・・・・・・・視覚障がいと聴覚障がいの子どもを対象としており、知的障害が重複している子どもはいませんでした。まず、全寮制であるのに、視覚障害と聴覚障害の子どもの生活する施設・設備は同じで、バリアフリーでないことに驚きました。しかし、教科学習などをする部屋には全てに電子黒板が設置されており、言語指導室、行動指導室、マッサージ室など機能教室が設備されていました。教材・教具については、知的障がいの子どもに使用されているような認知課題や手先の巧緻性を高めるものがありました。

教材は、市販のものを使用しており、実態に応じて作

成することはないそうです。個別の支援計画や個別の指導計画はないそうですが、就労についてのサポートは手厚く、企業が学校を訪れて保護者・生徒・教員と面談の上就職先が決まるため、就職率は 100%だそうです。
また、手話は世界共通であるのか疑問に思い試してみました。日本で「ありがとう」という手話は、中国では「ものを置く」という意味の手話になることが分かりました。非常に興味深い視察となりました。

高倉　洋美・・・・・・・・・住宅街・商店街の一角の門を入ると、広場を囲んだ校舎が現れ、正面には今までの視察校の全てに設置されていたものと同じ液晶大画面で、歓迎の言葉や生徒のパフォーマンスが写されていた。校舎や施設はもちろん、とてもきれいで充実していた。障がいの度合いでクラス編成がなされていたようで、小学校低学年くらいの児童生徒と中学生くらいの生徒が同じ教室で同じ教材を学習していたことは、すごく印象的だった。日本ではなかなかみられない光景だと。それに、どの児童生徒も積極的に発表したり自分から積極的に次々に教材を持ってきて取り組んだり、作業も集中して黙々と進めていた。私たちが視察に来たからではなく、日頃からそのような取り組みをやっていることは、子ども達の表情から読み取れた。障がいの度合いや、児童生徒 1 人ひとりにあった授業こそが、大切だと実感させられた。やはり、何が子ども達に必要で、重要なのか考えなければならないと思った。

そして、最後に液晶画面のある中庭での写真撮影。校舎から中庭を眺めていると、すでに準備がされており、太陽の日差しで椅子が焼けないように逆さに返してあったが、私たちが来たと同時に椅子がきちんと並びなおされた。この細かい配慮にも、とても歓迎していただいていることを実感した。が、何よりも児童生徒が、手作りの飾り物を作ってプレゼントしてくれたことがとてもうれしく感動した。私に渡してくれた女子生徒は、とてもかわいい優しそうな女の子だった。その表情がとても印象的で、お礼をきちんと言いたかったが、手話もできない私は、自分の気持ちを伝えきれなかったことを後悔した。手話もしっかり身につけておくべきだった。

浦東新区洋涇実験小学校

［上海市］ 6 月 17 日(金)

学校長：陳岩泉（CHEN Yanquan）
設立年：2000 年
児童数：約 1500 名

4 年生の理科の授業で使用されるガーデンファーム

学校のモットーは「よりよい生活のための学習」である。体育と芸術に力を入れた教育活動を行っている。毎学期行う 2 週間のスポーツカーニバルは、児童が赤組と青組で勝利を競い合う。2000 年に創立の比較的新しい学校で、専門家の指導を受けながら、情報機器を活用した授業など先進的な教育を行っている。

1．学校案内
○ガーデンファーム:4 年生が植物を育てているガーデンファーム（温室のビニールハウス）を見学。理科の研究活動をしている。このファームにあるプチトマトやピーマン等の栽培を通じて、科学的な思考を深めている。温室は、タブレット端末で管理され、温度や日光量、水の量を調整する。定期的に児童がタブレット端末で写真やデータ分析を行う。また、日光量を調節するひさしや水などを制御する電力は太陽光パネルから供給され、環境にやさしいアプローチをしている。成果よりも研究のプロセスを重視し、問題を解決する能力を育成している。
○学校玄関:学校正面のモニュメントは、教師は明日の太陽を上げることをイメージしおており、よりよい生活のために努力することを推奨している。また、モニュメントには、児童の協調性を養うことも象徴しており、運動会では、約 1500 名の児童を赤組と青組に分けて、2 週間試合をし、チームで競わせている。校門付近のポールには、勝ち数を示すテープ貼っている。

○運動場：1 週 250 メートルのトラックと人工芝を備えている。
○QR コード：校庭や校内に設置。授業内容（体育・音楽など）や校歌、教員の PR 等を知ることができる。
○81 人の教員のプロフィール（校内）：先生のことをもっと知ることができ、掲示してある。写真は先生方の日常風景の中で撮られたものである。
○体育館：子どもたちが体操の練習をしていた。同校以外の子どもたちも参加。小1・2年生の子どもたち20数名がいた。
○校舎：タブレット端末専用教室が設置。

2. 多目的室にて交流会：
【児童の活動紹介ならびに懇談】
○校長陳岩泉氏　あいさつ
金曜日の午後の授業がなく、今日は、すでに児童は下校している。一部の児童が、訪問団のために残り待機している。児童のパフォーマンスを見ていただきたい。
① 児童からのあいさつ
② 民族舞踊　チベット舞踊 「辺疆素描」
③ 民族楽器による演奏（揚琴）
④ 書道のパフォーマンス（書と書画）
⑤ 7 歳の児童のピアノ演奏
⑥ 空手の演武
⑦ 京劇
⑧ 書と書画の贈呈
○訪問団のパフォーマンス
「さくらさくら」「ジャスミン」を唱和
○学校紹介 VTR 視聴
○校長陳氏より学校説明
「よりよい生活のための学習」が学校教育のモットーである。以下 4 つを意識している。①基礎課程、②個性を養う課程、③キャリア教育、④社会参与の 4 つである。基礎課程には、必修と選択（選択必修と選択）がある。例えば、生活に関するものでは、生活に必要不可欠な技術を学び、日常で生かす。ボタンつけやオーガニックガーデンなどを重視している。
学校の特色は、子どもが小校長として、校長先生と一緒に働く機会を設けている。食堂や交通の安全管理を行ったり、学校周辺の渋滞問題の解決に当たったりする。
家長講壇では、保護者が学校に来て授業をする。社会全体の様子を子どもたちに学ばせている。
また、2014 年から 2016 年熊本県の小学校へカードを送っており、2016 年 4 月の地震の際もカードを送った。今年の 6 月 29 日には長崎県の小学校を訪問予定。スペイン・フィンランド・オーストラリアとも交流を行っている。
○副団長　河田重吉氏あいさつ
私たち訪問団は、日本各地の小・中・高・大の教員です。今回このような機会をいただいた上海市浦東洋涇実験小学校に感謝します。今回訪問させていただいた学校は、すばらしい特色をそなえた学校でしたが、貴校もとてもすばらしい学校だと感じました。子どもたちのパフォーマンス、ビデオ、校長先生のあいさつなど、どうもありがとうございました。長崎市と上海市も長い間友好関係を結んでいます。今後もよろしくお願いします。

3. 質疑応答（日→中）
Q. ICT の活用が進んでいるが、費用は、どこからの補助があるのでしょうか。
A. 政府は、公立学校に対し同等額の補助金を出すが、資金運用は校長によって行われる。
Q. 音楽の宿題をインターネットで先生へ提出し、すぐに先生から返答があり、子どもの意欲の向上につながったという話があったが、ネットに対応できない家庭はどうするのか。
A. 上海では、ほとんどの家庭でインターネットが設定されていて、今までそのような問題は起きていない。このソフトを開発するときにも保護者から意見を聞いている。

5. 記念品交換
同校から切り絵と児童が書いた書道を頂いた。
訪問団から会津塗りの写真立てを贈呈した。

（對馬　俊晴・肥塚　友子）

《参加者の感想》
松村　隆寛・・・・・・・・・・課外活動として体操教室を放課後に体育館で実施している。スポーツを通して、協力する心を育成することはとてもよい取組みだと思った。体育の学習がきっと楽しくなるなと感じた。自分の学校でも取り入れてみたい。 タブレットを用いた学習が非常に充実していて驚いた。これからの時代、ICT 機器の活用は不可欠だと思う。この取組みは非常に画期的だと感じた。

根岸　綾子・・・・・・・・・問題解決学習など、知識だけでなく、深い学びが行われていることを知った。タブレット端末など、ICT 機器の活用にも力が入っていると感じた。この学校では、選択授業で学習した伝統的な踊りなどをたくさん見せていただいた。日本では、伝統的な踊りが踊れるかはおろか、どんなものがあるかさえ知られていないものも多いと思う。学校で積極的に取り上げていくことはとても大切なことだと思った。また、様々な民族が共に暮らす国ではより大切なことなのだろうとも思った。

圓山　裕史・・・・・・・・・上海で訪問したこの学校は、ICT 教育に力を入れていて、タブレット端末が導入されていたのがうらやましく思えた。今まで見てきた中国の学校はそもそもの設備がすごすぎて、真似できるようなものではなかったが、これは日本でも近い将来、導入されることも想像が出来て、参考になった。QR コードでその授業の動画などが見られれば、指導するときにも効果的であろうと思えた。

4.
歴史と文化訪問

故宮博物院・天安門
北京国家体育場
寧夏中阿之軸
賀蘭山岩画
西夏王陵
外灘
中華芸術宮
豫園

故宮博物院（紫禁城）天安門

[北京市]　6 月 12 日(日)

故宮博物院は明、清の歴代皇帝と皇后が暮らした宮殿の遺構で、清代には紫禁城とも呼ばれた。総面積 72 万㎡の広大な敷地に、南の午門から北の神武門を中心に左右対称に造られている。膨大な文化財を収蔵し、1987 年には世界遺産にも登録された。

天安門は故宮の外城壁南側に位置する正門である。1949 年 10 月 1 日に、毛沢東が楼上から中華人民共和国の成立を宣言して以来、中国を象徴する場所となっている。

故宮は、昔の紫禁城で世界最大の皇居。10 年で材料(クスノキや太湖石)を集め、5 年で作った。建物すべてが展示品といってよい。まずは午門、金水橋、太和門、太和殿、保和殿と見学していった。ここまでが外朝であり、故宮の中で皇帝の職務に関わる公の建物部分だそうである。

門を出ると、物売りをする人々に囲まれる中を、歩きぬけた。盲目の息子の手を引きながら、物売りをする母親の姿を見て、中国の社会保障などに関心を持った。

次に天安門に移動。天安門広場は、観光客でいっぱいで、国旗降納を見ようとする人たちが日没を待っていた。天安門は、もともとは世界遺産である故宮の正門であったもので、現在は中国を象徴するものとなっている。長さ 880m幅 500m、100 万人を収容するそうである。毎年、毛沢東の絵が貼りかえられ、毎日日の出と同時に国旗を掲揚しているという。私たちも写真撮影をしたり、風景を楽しんだりすることができた。

（芳賀　裕美・佐久間　みのり）

北京国家体育場

[北京市]　6 月 13 日(月)

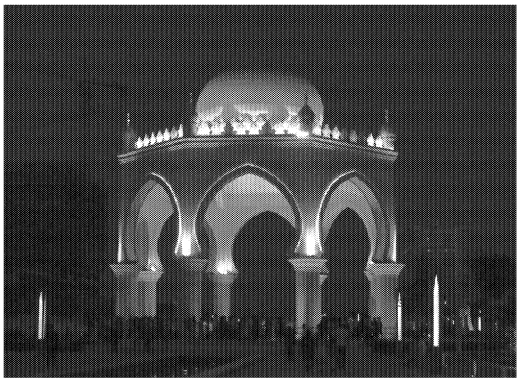
陸上競技場であり、中国最大のスタジアムである。北京オリンピックのメインスタジアムであったその独特の形状から、愛称は「鳥の巣」である。大きさは 330m×220m で高さは 69.2m。総工費は 35 億元。オリンピック開催に向けて、当時の最大収容人数は 9 万 1 千人であったが、大会の終了後は 8 万人席にまで改修された。

雨のため、「鳥の巣」付近でバスを停車、歩道橋の上から希望者が自由に視察。多くの参加者が写真撮影した。

（肥塚　友子）

寧夏中阿之軸

［銀川市］　6 月 15 日(水)



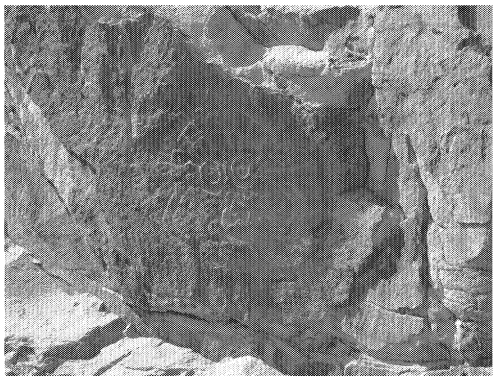
寧夏回族自治区の銀川市にあり、中国とアラブ諸国の友誼のシンボル的広場である。全長 2.1 キロメートルの遊歩道内に、モスクのような建物や、中国門のような建物がまさに一つの軸上に建てられている。夜はライトアップされ、とても美しい夜景が見られる。

訪問団は、各自写真を撮ったり、散歩を楽しんだりして、過ごした。市民による、歌やダンスなどのイベントが行われていた。

（芳賀　裕美・肥塚　友子）

賀蘭山岩画

［銀川市］　6 月 16 日(木)



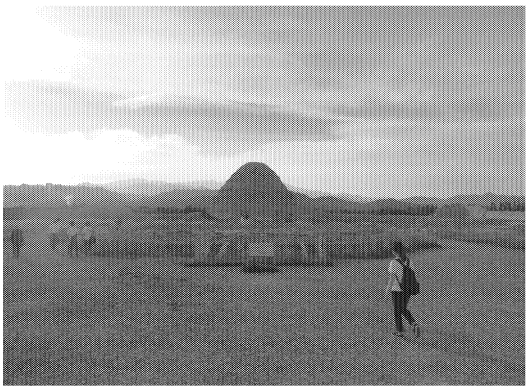
寧夏回族自治区北部の岩山に描かれた絵である。紀元前 8 世紀から 1000 年もの間、人や馬、羊、鳥など生活と密着した動物の絵が描かれ続け、現在まで残っている。岩画には、西夏文字（現在の漢字とは違う）も彫られている。

銀川市郊外にある賀蘭山岩画を見学した。賀蘭山は石の名産地で寧夏回族自治区教育庁から記念品にいただいた印鑑もその石を使っているとのことだった。銀川市内からバスで約 1 時間半移動し、まずは「銀川世界岩画館」へ。この博物館は 3 階建てで、1 階は賀蘭山を始めとした中国各地や世界各地の岩画（壁画）が展示されており、フランスのラスコー壁画の洞窟展示や日本のものも紹介されていた。2 階は岩画と文字、3 階は原始美術の展示があった。その後、電気自動車に乗り、賀蘭山へ。険しい岩山のあちらこちらに刻まれた岩画を遊歩道に沿って巡りながら鑑賞した。これらは 1969 年に学者が視察に来た際に発見されたという。狩りや動物、太陽神、さらには文字など様々な岩画を目にすることができた。

（町田　登志子・佐久間　みのり）

西夏王陵

［銀川市］　6 月 16 日(木)



西夏は、李元昊 1038 年に建てられ、1227 年にチンギス・カンによって滅ぼされたタングート族の国であった。西夏王陵は、東西に 4km南北 10kmのエリアに 9 つの皇帝陵と 70 余りの陪葬墓が残っている。当時の都は興慶、現在の銀川市である。

次に、西夏王陵へ移動した。ここには元に滅ぼされた西夏王国の王族の墓がある。ここでも電気自動車に乗り、まずは「西夏博物館」へを見学した。第6展示室まであり、王陵墓から出土した品々を中心に西夏時代の社会、文化、宗教などについての展示があった。また、2 階にはジオラマがあり、建設当時の王陵墓の豪華さ、壮大さを感じることができた。博物館

を出て、徒歩で王陵へ向かった。草原の中に土でできたピラミッド状の墓がそびえていた。元が攻めてきた際に外側の建築物が破壊され、内側の土でできた部分のみ現存していたが、その大きさや広さから当時の勢力が伝わってきた。

（町田　登志子・佐久間　みのり）

外灘

[上海市]　6 月 17 日(金)

上海は、1842 年のアヘン戦争後の南京条約により開港した都市である。その後、欧米列強が租界地を作った。その租界地の名残が、外灘である。ここには 20 世紀初頭に建てられた西洋式建築のビルが立ち並び、歴史的な国際都市上海の景観を形成している。黄浦江をはさんで対岸の浦東には東方明珠塔や金茂大厦が建ち、夜はライトアップされ上海の華やかさを一層引き立てている。

外灘の和平飯店前でバスを下車。30 分のフリータイムでは、各自自由に外灘を楽しんだ。

外灘の建築物群は、1996 年に中華人民共和国の全国重点文物保護単位に指定された。外灘地区には世界中のブランドショップの旗艦店が建ち並び一大ショッピングゾーンにもなっていた。昼間も賑わっていたが、後日、夜に訪問すると、その夜景の美しさと人の多さに驚かされた。

（對馬　俊晴・壷井　宏泰）

中華芸術宮

[上海市]　6 月 18 日(土)

「清明上河図」

中華芸術宮（チャイナアートミュージアム）は 2010 年に上海で行われた「上海万博」の中国国家館の建物を、万博後の 2012 年に上海美術館を移転させ、拡大してオープンした芸術館である。中国人作家の作品を展示する芸術館として活用している。

訪問団は 1 時間ほど各自自由に見学した。10 時の開場前だが並んでいる。地方から観光に来る人多い。建物は非常に大きい。現代美術の作品が多く、また労働者をモチーフにした作品や高速道路など、近代化の様子がわかる作品（社会派）の巨大な作品が展示されていた。

見ものは「清明上河図」の蒔絵を動画化したもので、話し声やまき割の音など動画に合わせて音声も入っており、非常にリアルに北宋時代の人々の様子を感じることができた。日が昇り、沈む様子も描かれ、飽きずに見られる。アイデアも面白い。周囲に水が張り巡らされていうような展示室も蒔絵にぴったりで美しかった。

1970 年代の中国アニメーションのコーナーや、フロントで受け付ければ、館内の作品をWEBでみられるパソコンのブースもあった。美術館グッズをはじめとするお土産屋さんもデザインに凝っていたものが多く、見ていて飽きないところであった。

（町田　登志子・佐久間　みのり）

豫園

[上海市]　6 月 18 日(土)

明代に造られた江南を代表する古式庭園。園内は 5 つの景観区と内園に分かれ、大小の楼閣、緑、池の水面、美しい名石が見事に調和している。庭園を囲むように土産物屋や軽食店がひしめき、多くの観光客でにぎわっている。

訪問団は各自自由に散策した。それぞれお土産などを買う。観光客であふれており、外資の飲食店なども軒を並べている。その後、再び集合し、希望者はバスで南京西路に移動して、高級ショッピング通りを観光した。

（町田　登志子・肥塚　友子）

上海市内自由視察

[上海市]　6 月 18 日(土)

豫園見学後、上海の繁華街である南京西路に向かうグループと、上海市内を自由に視察するグループに分かれて行動した。

高校の理科教師 3 で上海科学技術館を訪問。地下鉄 2 号線上海科技館駅と直結しており、周辺は世紀公園と一体化した都市公園となっている。

展示は、 生物万象、地殻奥秘の探索、智慧の光、デザイナーのゆりかご、レインボー児童楽園、世界動物展、地球家園、ロボット世界、情報時代、クモ展示、探索の光、人と健康、宇宙飛行天地である。

展示内容は日本の科学館と良く似ているが、中国の古代の地震計の実演や、生殖のコーナーにおける映像等日本とは異なる展示も見られた。

土曜日ということもあってか、家族連れで賑わっていた。4D 等の映像やゲームを取り入れた展示も多く、小学生が楽しめる内容が多いと感じた。子供連れの家族が非常に多く、上海市民の科学・技術への関心はかなり高い様子が窺えた。

（對馬　俊晴・壷井　宏泰）

《参加者の感想》

圓山　裕史・・・・・・・・・奈良市では世界遺産学習に力を入れて進めているため、やはり世界遺産である故宮の見学は、思い出に残った。未来に残していくための補修工事などもされていて、放っておけば劣化していくものであるから、「未来に残していこう」という人の思いが同じであると感じられた。

また奈良の平城宮跡の造りに似ているなと感じるところもあり、歴史的なつながりを感じることもできた。

5. 成果と今後への活用

Ａグループ

中国政府日本教職員招聘プログラムをふり返って　－ 感謝聘請我 －

大牟田市立羽山台小学校　宮下　哲夫

今回の中国政府日本教職員招へいプログラムでは、団長の大役を仰せつかり、大変緊張した1週間となりました。微力でしたが、団員の皆様のご協力のおかげで、どうにか務めることができました。

さて、今回のプログラムでは、中国政府のご好意により北京市、寧夏回族自治区、上海市の小・中・高等学校、特別支援学校６校を訪問させて頂きました。授業を参観し、校長先生をはじめ諸先生方の話を伺う中で、中国の教育理念や制度、具体的指導について、しっかり学ばせて頂きました。また、子どもたちとも十分な交流の時間がありました。きらきらした瞳、明るい笑顔。どの子も十分な品格を持ち、人間性豊かな人材として育っていると感じました。

今後、日本の子も中国の子も互いに手を取り合う、さらにグローバルな人材へと育てることが大切です。今回のプログラムは、学校間、教師間の相互理解、友好交流がその基盤となることを実感させてくれました。

[今後への活用：学校において]

中国の教育制度の概要、学校教育の現状、実際の訪問で得た知識などについて伝えるため、職員研修を行った。本市・本校において、ESD の取組みをさらに充実させ、日中共通の課題意識を持って、相互に発信・交流していくことで、両国の児童生徒が意義のある国際交流になるように切望する旨を伝えた。

中国の学校との実際の交流活動については、大牟田市と山西省大同市との友好交流 35 年を機に考えていきたい。大牟田市がそうであるように、大同市でもすべての学校がユネスコスクールに加盟する意向であると聞いている。7 月 3 日からの自治体国際協力専門家派遣事業における山西省大同市訪問において、教職員との意見交流で、その方途を探りたいと思う。

[今後への活用：その他において]

中国の教育制度の概要、学校教育の現状、実際の訪問で得た知識などについて、校長会やユネスコスクール担当者会、教育長報告や環境技術交流実行委員長報告を行う予定である。

また、前述のように、私は 7 月 3 日から、自治体国際協力専門家派遣事業において、四度、山西省大同市を訪問することになっている。前回までと同じように環境学習の指導を行ったり、現地教職員との意見交流を行ったりする予定である。そこで、今回の中国政府日本教職員招へいプログラムで得た知識・情報を大いに活用したいと思う。

[中国との教育交流についての具体案]

1. 大牟田と大同の両市に、環境教育の交流指定校のようなものを選定して頂く。選定に際しては、友好校である平原小と第十八小、宅峰中と第三中を軸としながらも、エネルギー環境教育実践校（大牟田市側）やグリーン学校、実験学校（大同市側）などへ、環境教育の交流指定を拡大する。

2. その交流指定校で 9 年間の「環境教育共通カリキュラム」を開発する。開発の基本には、エネルギー環境教育実践校の指導計画と中国側の副読本「环境教育」を置き、それぞれの地域の特色を生かしながら、持続可能な世界の構築を考えていけるようなものにしたい。

3. 「環境教育共通カリキュラム」の実践を通した児童生徒による相互発信、交流が考えられる。お互いの学びの様子や成果を作品交換、メールなどの手段を通して交換し合うことが可能だ。また、地球温暖化を含む地球的諸課題についての総合的な理解を深めるために児童生徒による「話合い活動」も設定したい。両市の児童生徒が「環境」という共通の課題意識を持って、相互に発信・交流していくことで、これまで以上に意義のある国際交流になるのではないかと思う。

充実した中国訪問を終えて

市川学園　市川中学校　芳賀 裕美

今回の中国訪問で、他の国の教育制度や教育内容を知ることができたことは、ひいては日本の教育制度や教育内容を見直す良い機会となった。北京・寧夏・上海の各地を訪問して感じたことは、中国が国をあげて教育に力を入れていること、貧困地域の子どもたちや、支援の必要な子どもたちに対して手厚い保護がされていること、である。どの学校でも、先生方が熱心に勉強し、今導入できる最先端の教育に取り組んでいた。それだけではなく、学校によっては第 2 の父母となり、生徒に心底寄り添った教育を心掛けている。このような考え方は、これから先、私たち日での教育に必要となってくるものだと思う。奇しくも帰国後、イギリスの教育機関が発表しているアジアでの大学ランキングでは、東京大学を抜いて中国の北京大学と精華大学が上位に入った。このような中国の教育を実際に見ることができたことは、非常に有意義であった。今の気持ちを忘れずに、日本での教育活動に還元していきたい。

[今後への活用：学校において]

私が日々接している中学生にとっては、中国は隣国ではあるが、授業やニュースでしかその情報は得られていない。そんな中で、私が感じたことを授業や HR の時間に話すことで、中国に対する多様な理解を進めていきたい。現在は、中国に興味を持ち、自分で中国語を勉強したりしている生徒もおり、その手助けとなりたいと思う。

[今後への活用：その他において]

中国という国をニュースや新聞その他の情報からの印象で見ていたが、実際には一人ひとりの国民は情熱的で、日本人にはないパワーを感じて帰国した。このような経験は、学校という現場のみならず、私の生き方にも影響を与えた。既存の考え方にとらわれない考え方をすることで、私の仕事や生活そのものを、よりよいものにしていきたいと思う。

[中国との教育交流についての具体案]

現在、中国教職員招へいプログラム視察受け入れを行っており、これについては、持続可能と考えられる。

寧夏回族自治区銀川と訪ねて

千葉県立佐倉南高等学校　伊藤　陽一

北京、銀川、上海と巡った今回の訪問について、中国という国を知る上でどれも貴重であったが、とりわけ私には銀川が印象的であった。寧夏回族自治区銀川という、個人の旅行では中々行くことが難しい地域であったが、教育庁の方、訪問先の先生、児童生徒、その他市井の人々とのふれあいの中で、様々な収穫が得られた。

盲生のピアニストの演奏は忘れられないものであったが、何より返礼の歌を弾いた後の抱擁が、言葉は分からないが人間同士の気持ちが音楽によって通じ合えたと思えたことが、もっとも印象的な出来事であった。

また、銀川市第二十一小学子どもたちの無邪気な様子、第二十四中学での生徒の元気な姿、夜の街で目を輝かせる若者、屋台に集い酒飲み交わす市井の人々の表情、さらには行程中始終随行された中国教育国際交流協会除さんとの交流などを通じて、国や言語、文化は違えど、人間としての根底に流れているものは、我々日本人と変わらないのではと考えさせられた。

険しい岩の積み重ねられた賀蘭山、荒涼とした大地にひっそり眠る西夏王陵の風景とともに、銀川は実に印象深い訪問であった。

また中国において、芸術教育重視の方針、高校における 6 時間必修カリキュラム等音楽教員として羨ましいが、実学以外にも力を注ぐ中国という国の奥深さを知らされる思いであった。帰国後すぐにアジアの大学格付けランキングが報道され、日本の大学が中国に引き離されてしまった評価を知ったが、国家の中での教育の重要性について改めて知らされる思いがした。教育は国家の根幹であると考えさせられる。わが国において、教育の一層の充実、そして芸術教育の充実について、強く望むと考えさせられた訪問であった。

[今後への活用：学校において]

音楽の授業、合唱部において中国の歌を紹介し指導を行った。

2 学期始業式において、パワーポイントを用い、生徒に中国の学校教育、文化・伝統、現状等について紹介する予定である。

2 学期職員研修において、勤務校職員にパワーポイントを用い中国の学校教育、文化・伝統、現状等に

ついて紹介する予定である。

[今後への活用:その他において]

7 月 5 日全日本音楽教育研究会高等学校部会全国常任理事会、7 月 7 日千葉県高等学校教育研究会音楽部会理事会において中国における音楽教育の現状について、動画、写真他資料を用いて紹介した。

今後も音楽教育研究会、部会誌等において発表、紹介する予定である。また、合唱部において中国の歌を自ら編曲し、校内校外様々な機会において発表、紹介する予定である。

中国と交流予定の千葉県内の高校の音楽教諭から依頼を受け、編曲した楽譜の提供と歌唱指導を実施する予定である。

[中国との教育交流についての具体案]

学校を訪問していただき、施設、授業、部活動見学し職員と情報交換会を持つ。

学校近隣にある国立歴史民族博物館、川村美術館等の見学。校長、県教委が認めれば実施可能である。

教育の意義を考えた

千葉県立鎌ヶ谷西高等学校

町田　登志子

中国はとにかく規模が大きい。教育設備にお金を投資する姿勢も一貫している。非常に大きくてまっすぐで動きの速い国だと思った。日本だったらその設備を作るまでに、教育制度を作るためにどれほど時間が必要だろうかと思った。そして、中国の急激な経済成長を支えるために教育も取り急がれている印象を受けた。さらなる経済成長のための人材育成を。

そして思った。日本の教育はどうだろうか。教育は社会にとってどれだけ貢献できる人材を育成できるかということも目的の一つだと思う。ではどんな国を作っていくのか。どのような国の在り方が国民全体にとって求められているのか、子ども、大人国民全員がもっと考えていくべきなのではないかと思った。どのような社会でも自己実現できる力とか、生きる力とかいうよりも、これから、こういう国にしていきたいから自身に必要な力はこういう能力なのだということを生徒が考える機会がもっとあってほしいと思った。自分が学ぶ意義というか、社会で生かす意義というか。中国は日本より明確な気がした。

[今後への活用:学校において]

中国の高校生や教職員の受け入れなど行なっていきたい。HP などで今回のプログラムの記録を残したい。また、ユネスコの活動において他校を含め、生徒に話をしていきたい。自分の授業においては、この授業で身につけさせたい力というものをもっと明確にしていこうと思う。これからの社会について話をして、だから私はこういう能力が必要だと思う。学習指導要領でもこういう観点で生徒の評価を行うようにといっている。だからこの授業を行います。というように、できるだけ生徒に学習の意義を理解させていきたいと思う。

[今後への活用:その他において]

近隣中学校や地域を交えて留学フォーラムなど開催するにあたり、自分が経験して知っている中国の教育状況を積極的に共有していきたい。中国の教育はもちろん、他国の教育にも目を向け、知識を深めるとともに、市で行われている文化交流のボランティアなどにも生徒とともに積極的に関わっていけたらと思う。

[中国との教育交流についての具体案]

本校では授業の交流が主になると思う。授業のほかにも茶道部や弓道部など日本の部活動を見学、経験していただきたい。やっているところを見せるというよりも、ともに学び、活動を一緒に行ってみるとより深い交流ができるのではないかと思う。その先の計画として、鎌ヶ谷市は小さな市なので、小学校、中学校、高校とそれぞれの授業の流れがわかるように見せられたら良いと思う。小学校で習ったことがどう中学、高校に活かされるのか、昨今の小中連携、中高連携の交流ができたらよいと思う。

市内の中高連携が研修を共にするなど進んでいるので実施できる可能性は高いと思う。

素晴らしい出会い

狛江市立狛江第三小学校　松村　隆寛

私は今回が初めての中国訪問となった。日本と文化的にも経済的にも関わりの深い中国を訪問し、学校現場を視察することは、私にとって非常に貴重な体験となった。その中でも特に有意義だったと感じることが 3 点ある。

第 1 点は、中国の学校現場を実際に見ることができた点だ。各校で、目指す児童生徒像を具体的に定めて、特色ある教育活動を行っていることは、抽象的な教育目標を掲げていることが多い日本が見習うべき点だと強く感じた。また最新の設備を取り入れた校

舎で、各教科の専門性を生かせる充実の教具を用いて授業を行っていることを知り、大いに刺激を受けた。

第 2 点は、多くの中国の方と関わる機会をいただいた点だ。1 週間案内をして下さった徐さんをはじめ、学校現場の先生方、教育部の方々などに懇切丁寧に案内をしていただいた。皆さんの温かい人柄に触れ、初めて中国を訪れた私も、中国を非常に身近に感じることができた。

第3点は、日本全国の様々な校種で活躍する先生方と仲間になれた点だ。このプログラムに参加しなければ絶対に出会うことがなかったであろう高い志をもった先生方と、中身の濃い交流をすることができたことは私のかけがえのない財産となった。

このプログラムに参加し、国内外にたくさんの素晴らしい仲間を得ることができた。中国の素晴らしさをたくさん知ることができた。中国と日本、これからも切磋琢磨し、お互いに高め合う関係であってほしいと思う。そのために今回の経験を何かしらの形で生かし、貢献していきたい。

[今後への活用:学校において]

①教員への実施報告

今回の教育交流事業に参加し、小中高、特殊学校と回って、学んだことや感じたことを中心に、日中の教育や、文化などについて比較し、それぞれの国のよい点や、課題と思われる点について報告する。

②児童生徒への発表

・集会の時間を活用し、簡単に中国の学校の様子を報告する。

・同じく国際交流事業で韓国に1週間派遣された教員と、都の英語活動の取組でアメリカに派遣された教員がいるのでその 2 人と連携し、日中韓米の教育や文化について楽しく学べる集会を行う。

[今後への活用:その他において]

・研究会などへ積極的に参加し、今回の経験を広めていく。

・今回の経験を、社会科の授業を通して、広める。

[中国との教育交流についての具体案]

・教職員団の受け入れ

→狛江市では、昨年度韓国の教職員団の受け入れを行っている。中国の教職員団の受け入れも可能だと考える。各教科の授業を公開し、授業の進め方等について中国の先生方と論議をかわしたい。

・ICT 機器を活用した児童生徒相互の教育交流

→狛江市は全校にタブレット端末を導入し、ICT の環境が整備されている。中国でもタブレット端末を活用した教育が盛んだと今回の訪問で伺ったので、その環境を生かし、交流を行うことが可能なのではないかと考える。

中国での研究を終えて

埼玉大学教育学部附属中学校

根岸　綾子

教育に関して、大きく 2 点述べたいと思います。

1 つ目は、国の伝統や平和を大切にしているところです。例えば、銀川の小・中学校では国学の教室がありました。机や椅子、壁紙や掲示・展示されているものが揃えられており、国の歴史を学んでいきたいと思えるような教室となっていました。また、少数民族への理解を深める教室も設置されていました。いくつかの学校で民族の歌や踊りなどの学習が当然のように行われていました。日本の音楽教育においては、「我が国の伝統的な音楽」の取り組みについて課題があるのに対し、その差に驚きました。

もう 1 つは、教育に対する環境の充実です。学校の敷地や教室の設備の充実さはもちろんのこと、教員の研修するための教室があり、力を入れていることが伝わってきました。先生方の教科そのものの専門性の高さに圧倒されました。

学校をはじめ、国全体が活気にあふれていていることを強く感じました。また、親切で優しい中国の人々との出会いに感激しました。

[今後への活用:学校において]

・帰国生徒教育における一層の充実。中国の帰国生徒及び保護者への具体的配慮。中国以外の帰国生及び保護者への、日本ならではの困り感に寄り添う。

・アジアの音楽についての学習の一層の充実。我が国の伝統的な音楽の扱いの充実。

・中国の教育現場及び教員の研修への意識の高さの周知。

[中国との教育交流についての具体案]

○本校への教職員の招へい。

○2 年前にも来ていただいておりますし、実現可能と考えます。

自分の目で
“みて”“きいて”学んだこと

高知県立中村特別支援学校　大坂　真央

小学校・中学校・高等学校・特別支援学校など6校の学校を訪問することができ、本当に貴重な経験となりました。どの学校においても、子どもたちの豊かな創造性を育てるために特色ある教育課程が設定されていました。また、6 校ともに設備が整った環境の中で、子どもたちのたくさんの笑顔に出逢うことができました。体育や音楽、書道など子どもたちとともに活動できる機会をたくさん設定してくださったので、楽しみながら交流を深めることができました。様々な質問にも丁寧に答えてくださったおかげで、積極的に意見交換をすることができました。温かく迎えてくださったことに、感謝しています。

今回の研修を通して、中国についての理解や学校教育事情を知ると共に、日本の学校教育の素晴らしさにも改めて気付くことができました。また、全国から集まり、共に学び合い、寝食を共にした素晴らしい仲間との出会いに感謝しています。これからも日中両国間の一層の相互理解と友好発展に貢献していきたいと思います。

[今後への活用：学校において]

小学部 6 生（知的障がい・肢体不自由の重複）クラスにおいて、生活単元学習の時間にパワーポイントを使って写真・動画などを見せたりしながら、中国という国について知り、興味がもてるような授業をしたいと考えています。

また、職員に向けての報告会を予定しています。中国の教育事情や教育実践などについてパワーポイントで説明し、写真や動画などを活用しながら紹介しようと考えています。

本交流事業の一環として、11 月に中国教職員の訪問団を受け入れる予定となっています。今回の中国訪問で学んだことを生かして、日本らしいおもてなしの心を大切にした受け入れができるように、計画していきたいと思っています。

[今後への活用：その他において]

今回のプログラムに一緒に参加した、全国各地の仲間と継続的に情報交換をしていきたいと考えています。また、中国で知り合った方々ともメールなどを通して、近況報告や情報交換などをしていきたいと考えています。さらに、職場に限らず様々な機会を利用して、今回の中国訪問で学んだことや感じたことなどを伝えていきたいと思います

[中国との教育交流についての具体案]

11 月に中国教職員の訪問団を受け入れる予定となっています。自立活動、生活単元学習、作業学習など、各学部や各クラスで工夫して行っている授業の様子を見学してもらい、意見交換ができればと思います。中国では、子どもたちと一緒に活動したり体験したりすることを通してたくさんの交流ができたので、本校でもそのような時間を設定できればと考えています。

また、中国の特別支援学校では、市販の教材を活用しており、手作りのものはないということを聞きました。もちろん本校でも、市販の教材なども活用していますが、一人ひとりに合った教材・教具、支援ツールなどを教師が考え作って活用している場面の方が多いので、そのような場面も見ていただければと思います。

生き抜いていくために

福島県立ふたば未来学園高等学校
對馬　俊晴

北京、銀川、上海と 3 地域を見ることで、広く大きな国土・人口を抱える国としての多様な姿を感じた。北京では富裕層の厚さと貧富の格差を目の当たりにし、銀川ではムスリムが多く多民族国家の一端を、上海は頗る急速に発展する地下鉄網や超高層ビル群など昇竜の勢い見た。日本で報道される中国ニュースの背景にあるのは、国家、個人として、いかに生き延びるかという弱肉強食の生存競争なのかもしれない。兎に角、すべてが日本の 10 倍という印象で、人口 14 億人、GDP2 位の国の勝ち抜いていこうとする底力は凄まじいものがある。（日本も同様であるが、）経済的余力がある今のうちに教育力を高めて、有為な人材を育成しようとする姿勢が非常に強い。各学校は中国政府統制下の秩序だった画一的な側面もあるが、一方で、北京師範大学附属実験中学校に見られるように、将来、国の牽引を期待されるエリート層では、創造性・独創性を重視し、米国留学推奨など思想の自由の保障を感じさせる。政府の学校教育への投資、教師の努力、生き抜こうとする生徒の一生懸命さに、日本の教育の在り方を思い「学ぶ」意味を考えさせられ、見習うところが非常に多い研修となった。

[今後への活用：学校において]

昨年度開校した本校は、文部科学省スーパーグロ

ーバルハイスクール(SGH)の指定を受け、先進的な教育活動を行っている。その教育内容に、本プログラムで得られた成果を盛り込んでいく。昨年度はタイ、ドイツ、ベラルーシへの研修を行い、現在ドイツの高校との交流を行っている。また、ユネスコスクール加盟申請に向けて準備を進めているが、今後は SGH およびユネスコスクールを視野に入れて、中国の学校との交流も検討していきたい。

具体的な授業としては、1年次「産業社会と人間」、2・3 年次「総合的な学習の時間」において、課題解決型の教育(PBL)を行っているが、持続可能な社会づくりのための教材の1つとして取り扱っていくつもりである。

[今後への活用:その他において]

①本気さ、一生懸命さの重要性

訪問させていただいたどの学校の授業内容や授業への準備、学校、教師、生徒の学びなどの一生懸命さ、必死さに感銘を受けた。ついつい現状に満足、妥協しがちであることを反省している。今後は改めて、自分が担当する授業はもちろんの運営するプログラムや公務に関して、何事にも精一杯取り組むとともに、校内外、国内外のことを意識したものにしていくことを決意する。

②多面的・多角的なものの見方の重要性

今回の中国研修で印象深いのは、今さらながら、報道や伝聞で知ることは物事の 1 面でしかないということを肌で感じたことであった。総じて、中国の一人ひとりの国民は日本人がそれぞれであることと同様に大差なく、生活習慣や文化の違いや生きることへの力強さの一面が報道されているのだと感じた。また、国をまとめる政府の立場どうしのやりとりも今後は今までとは違う見方ができる気がする。そこで、今後の校内外の活動において、中国研修での経験を生かした多面的・多角的なものの見方をしたアプローチをしていくつもりである。具体的に経験を使っていくことにもなると考えている。

[中国との教育交流についての具体案]

福島県は、交流・研修などでたくさんの潜在的な力があると考えている。福島の現状が理解されるようになれば、観光面も含めて研修の機会を提供できると考えている。

(1)可能性

・福島で学ぶ生徒・教員との交流研修(福島県立ふたば未来学園高等学校、福島県立安達高等学校)

・東京電力福島第一原子力発電所周辺の見学(原発内の視察も可能)

・津波被害地の視察

・福島の食を通じての交流

・放射線の評価(関連施設、スーパー等視察)と風評問題など。

(2)その先の計画

・現在、福島市内の中学校が企画・運営しようとしている観光プランに乗る。

・本校での探究活動班「再生エネルギー」班が作成しようとしている、再生可能エネルギー関連の観光プランなど。

「中国 4000 年の歴史」にあらず、「5000 年の歴史」

荒尾市教育委員会　米村　光生

本プログラムに参加するまで中国の教育事情について、また、中国全体の課題として中心都市と地方との格差ではないかと漠然と理解していた。実際に昨年中国の訪問団員の話に中国の教育の課題は中心都市と地方との格差ということを聞いた。日本は地方であっても教育の水準というものは確保されているということに驚いているという感想を持ったという団員もいた。

今回、寧夏自治区という地方都市を訪ねた。私のそれまで抱いていた中国の地方の教育事情とはまるで違った現実があった。公立の小中学校でありながら大学と見間違うほどの近代的で広大な施設、最新の教育環境に目をみはるばかりであった。もちろん、このような状況は地方の極一部であり、また、政治的に安定を図る施策ではないかという考えもあることは理解しているのだが、中国政府の地方の教育に力を注ぐ施策を垣間見ることとなった。一部ではあるが最高の教育を施した生徒らが十数年後は地方の次代の子どもたちを育てる。という先を見越した施策ということであった。地方の優秀な人材が十数年後、数十年後は経済界、教育界において活躍し、地方を発展させるということと理解した。さらに驚愕したのは銀川の林立する大型マンション群である。数十年後にはこの街が何百万の都市になるという見立てである。日本の教育は数年単位で施策を変えてきた。中国の数十年先を見越したものの見方にまさに大陸国家のスケールの違いを感じた。ガイドさんが「中国 4000 年の歴史と日本人は言うが、5000 年の歴史です。」と言ったことが印象的であった。

[今後への活用:学校において]

帰国翌日の 6 月 20 日(月)19 時から、早速ではあったが、本市内の管理職を目指す小中学校の中堅

教員（約20名）の自主研修会を開催した。グローバル化を目指す現在の教育界において他国の教育の現況や動向を知ることは有益である。児童生徒の育成とともに、教員の育成も担う教育管理職を目指す彼らにとってまたとない機会と捉え、今回の訪問で実際に見て聞いて感じたことを直接伝えた。彼らにはそれぞれの学校現場にもどり、国際理解教育の分野等で活かしてもらいたいと考えている。同時に本市では中国と所縁の深い史跡も存在し、我が郷土を知り、誇りを持たせるとともに国際的な視野を子どもたちに身につかせる機会にするようお願いした。

[今後への活用：その他において]

中国教育部での説明の中に日中韓の高校間での交流を推進したいとの話があった。これまで本市において高校のプログラムへの参加はない。特に文化、スポーツの交流を望むということであった。本市の公立高校（1 校のみ）はサッカーやラグビーが盛んで全国大会に出場するほどの強豪校であるとともに、地元の伝統工芸品（陶器）を専門に学ぶ科もあり、施設も充実している。今後、高校の交流という点からも働きかけていきたい。

[中国との教育交流についての具体案]

本市と中国の歴史的な関係を学ぶ郷土学習（宮崎兄弟と孫文について段階に応じ、本市小・中学校すべての学校で実施している）を今年度からさらに充実させる取り組みを実施する予定である。これまで、その関係性や歴史を学ぶことにとどまり、具体的な交流とまで進展していないのが現状であった。実際に中国からの訪問団を学校に招いて交流を行った学校はあるのだが、一過性のものであり、その後の交流は行われていない。教職員や児童生徒の継続した交流にまで発展させる必要がある。しかし、大変遠隔地であり具体的な交流を行うといっても容易ではない。

幸いにして、今年度予算措置がなされ、市内すべての小・中学校にタブレット（小学校に1クラス分、中学校に 20 台）が導入されている。学習の補助的活用がその目的ではあるが、このタブレットを使っての交流ができないかと模索している。インターネットによる交流は時間も予算も不要である。学校のホームページの紹介や、子ども同士の情報交換などを実施したいと考えている。当然、子どもたちが情報等を交換するためには日本や、特に郷土のことを学び、理解することが求められるとともに、交流国についても理解する必要がある。このことが郷土を学び、他国について学ぶ動機付けとなり国際理解教育の進展につながると考える。また、一方でインターネットを使用することから情報教育の充実も図られる。全国的に SNS 等の負の影響が大きな問題となっているが、本市でも例外ではない。その対策の一助としての取り組みとなる可能性もある。

B グループ

感動

長崎市立高城台小学校　河田　重吉

はじめて訪れる国は、感動の宝庫である。1 番の感動は、中国の広さ・大きさである。まずは、北京空港の大きさ、溢れる人々の多さ、故宮の広さ、道路の広さ、銀川から賀蘭山岩画と西夏王陵までの広大な原野、どれもが感動させられた。2 番目の感動は、学校施設の充実と子ども達の学ぶ姿である。学校施設については、おそらく差が見られるのかもしれないが、今回の訪問先は、すべて近代的な施設と設備を備えていた。このような施設で学ぶ子ども達の姿勢もずいぶんすばらしかった。子どもの個性・特性を伸ばすことは理想であるが、日本の教育制度ではなかなか難しいと感じる。3 番目の感動は、歴史の深さである。これまで、中国の歴史については教科書で勉強してきたが、自分の目で見、肌で触れるとより深い感動が生まれる。故宮、賀蘭山岩画、西夏王陵には圧倒された。「百聞は一見にしかず」の言葉どおり、今回のプログラムはすばらしかった。

[今後への活用：学校において]

1　全校朝会での児童向け講話。

2　職員研修での報告。

[今後への活用：その他において]

1　長崎県国際理解教育研究会において「中国の教育事情」というテーマで発表。

2　長崎市校長会で発表。

[中国との教育交流についての具体案]

学校同士の直接的な交流は難しいと思われます。教育委員会を通し、交流の依頼があった場合、時期と場所に応じた交流が考えられます。以前、夏季休業中に依頼があった場合は、勤務している職員も少ないし、児童も登校していないため、課外クラブの児童とスポーツを通した交流を行ないました。通常日でしたら、状況に応じたいろいろな交流が考えられます。スポーツや文化を通した交流、授業参観、ディスカッション等。実施の可能性は、時期によると思います。職員が忙しい時期、例えば、成績処理を行なう学期

末等は誰もが嫌がると思います。いずれにしても、時期・人数・対象等によって実施が左右されると考えます。

意識改革！

奈良市立飛鳥小学校　圓山　裕史

中国の学校の教育設備のすごさが一番の衝撃であった。公立の学校でありながら、日本ではありえないほどの設備・環境が整っていた。中国が教育に力を入れていることを知識としては聞いたことがあったが、まさに「百聞は一見にしかず」である。教育部で話を聞き、実際の学校現場を見ることで、中国の教育事情をよく知ることが出来たと思う。実際に見て、肌で感じることができたことが最も有意義であったと感じている。

また、各学校や教育部への訪問だけでなく、世界遺産や名所への見学で中国の文化や歴史に触れることができたことは世界遺産学習、ESD をすすめる私たちにとって、とても良い経験ができたと思う。そして自由時間や食事、移動時間に至るまで、目に触れるもの、現地の人々や子ども達と関わった経験は国際理解教育を進める上で教材を得られたと感じている。このたった 8 日間の滞在であったが、他の国も見てみたいという意欲の高まりや教師としての幅を広げることができた素晴らしい経験であった。

[今後への活用：学校において]

・今回の訪問で自分自身の中国へのイメージが大きく変わったことを具体的に職員に伝える。（学校訪問の様子や通訳・ガイドさんの温かみなど ）
・道徳の授業などで、本事業の経験を紹介し、異文化について考え・理解する機会をつくる。
・全校朝礼や全校集会の時間を活用して中国の生徒の様子を伝える。

[今後への活用：その他において]

・訪問で頂いた記念品を校内に紹介するコーナーを設置する。
・学級通信を通して中国の文化や気づきを紹介し、保護者へ異文化を理解する啓発を行う。

[中国との教育交流についての具体案]

・教育交流が 11 月予定であることから、武道（柔道）の授業を参観。
・中国には家庭科の授業がないということだったので、家庭科や技術の授業参観。
・本校は掃除に力を入れているため、黙想からの無言清掃でぞうきんがけする姿をお見せしたい。
・日本の中学生との交流を直接行って欲しいので、中国の先生に授業をお願いしたり、互いに質問しあうような機会を設けたい。

国は違えども志は同じ

ＭＩＨＯ美学院中等教育学校
奥谷　貴子

中国の学校訪問や教育部への訪問では、中国政府が教育において大切にしていることや生徒の様子が分かり、大変勉強になった。そして、今後の教育活動に活かしていきたいと思う点は大きく分けて 2 つあった。

1 つは、寧夏育才中学や寧夏特殊教育学校のように卒業後の進路を見据えて、教育目標や活動計画を立てている学校では、生徒たちがその自覚をもって意欲的に学習に取り組んでいるということである。育才中学では、自習であってもさぼろうとしている生徒は見られなかったし、特殊教育学校では、時間いっぱいまで学習に集中して取り組んでいた。また、教師もその方針に沿って責任をもって教育活動を行っているため、学校全体に一体感があるように感じた。

もう 1 つは、自分や仲間、自国の文化に愛着や敬意を抱くことができるような学習を取り入れていることである。北京師範大学附属実験中学校では、古美術品が展示してある部屋をアレンジして生徒の個展を開催しており、生徒のがんばりや「美」を広めたいという教師の思いを感じた。また、多くの学校で中国の伝統的な踊りや演奏を選択授業などで取り入れ、全員が体験できるようにカリキュラムが考えられていた。

私の学校でもこの 2 つのことを大切にして教育活動を行っているが、中国視察を通して、現状で満足することなく、もっと工夫していかなければならないと思った。そして、教育に携わる人々の情熱や次世代にかける思いの深さは、国は違えども同じだと感じた。今後もこのプログラムで生まれた絆を大切にし、互いに高め合える交流ができるように働きかけていきたい。

[今後への活用：学校において]

・中国の学校の様子や美術作品、街並みや自然の風景を、美術の時間に紹介したり、教職員研修で紹介したりし、教育活動に活かす。
・また、今回のプログラムで知り合った日本や中国の学校と交流し、互いの学校の良さを学び合い、高め合う。

[中国との教育交流についての具体案]
・互いの学校で取り組んでいることを共有し、学び合い、高め合うことができるような交流をしていきたい。(スカイプやメール、データ、郵送でやりとり)
・「美」に関して取り組んでいること…美術の授業で制作した作品について良さを伝え合ったり、アドバイスしあったりする。文化祭などの様子を伝え合う。
・「米・野菜作り」について取り組んでいること…栽培法や種類、工夫などを伝え合う。
・「環境・生物」について取り組んでいること…田んぼや圃場などでの生き物調査の結果を伝え合い、地域の特性や課題などを共有し合う。
・「伝統的な文化」について取り組んでいること…昔遊びや餅つき、お節料理作り、豆腐・味噌作り、神社の行事、茶道、華道などでの取り組みを紹介する。中国の伝統的な文化についても紹介してもらい、異文化理解の一助とする。
・互いの地域の特性を紹介し合う。

知識で自分の人生を変える

札幌市立月寒小学校　佐久間　みのり

「百聞は一見にしかず」。寧夏教育庁訪問の際、かつての訪日経験をお話された方の挨拶の中にあった。今回の訪中は私にとって、まさにその通りであった。これまで数回旅行で中国を訪れてはいたが、実際に言葉を交わし、教えを乞うた中国の方々は素敵な方ばかりで、同じ教育に携わる者として大いに刺激を受けた。今回の訪問に当たり、日中両国で企画調整して下さった方々に心から感謝している。学びの多かった訪問であるが、中でも「知識で自分の人生を変える」という考え方が強く心に残っている。この考えが教師にも子どもたちにも根付いているのが強みだと思った。真剣な子どもたちのまなざし、またその意欲を受け止めるため、5 年ごとに教員免許の更新を行い、360 時間もの研修に取り組む先生方の真摯さに我が身を振り返ることになった。「子どもたちの人生を変えられるような授業を行っているか。」自問自答しながら今後の教育活動に当たっていきたい。

[今後への活用:学校において]
・児童に向けて
担任している5年生(3学級)に対し、総合的な学習の時間と外国語活動の時数を使って異文化理解の授業を行う予定である。昨年度もこの学年の児童生徒を担任しており、フィリピンと日本のつながりの学習やアメリカ・アゼルバイジャンとの手紙やスカイプでの交流など国際理解教育に取り組んできている。それらと関連付けながら、中国で見聞きした子どもたちの様子、生活や文化などを紹介していく。日本の子どもたちが「中国って素敵だな。おもしろいな。」との印象をもつ学習にしたい。
・教職員に向けて
職員研修などを通じて中国での学びを報告する。また、訪中で得た画像などの資料や作成した教材を校内ネットワークで共有する。
[今後への活用:その他において]
・所属している国際理解教育の研究団体でも、研修会などで中国での学びを報告したい。
・個人的にも再度の訪中を目指し、中国に関する学びを深めていきたい。
[中国との教育交流についての具体案]
・中国教職員の学校訪問の受け入れ
本校ではかつて JICA 訪問団を受け入れたことがあるそうなので、中国の教職員団の受け入れについて校内で働きかけていきたい。その際には、授業参観、児童生徒との交流、日本文化の体験授業、中国の教職員団によるミニ授業などが考えられる。
・スカイプやメールなどを通じた教員や児童生徒同士の交流。

寧夏回族自治区の学校訪問

さいたま市立木崎中学校　関根　朱美

寧夏回族自治区の学校訪問に行き、教育庁が教育に力を注いでいることが肌身に感じられた。また、児童生徒が意欲的に、熱心に学校で学んでいる姿が非常に印象深い。学校生活を生き生きと活動し、眼差しが輝いていた。これは、寧夏回族自治区の自然や環境も影響しているのではないか、とも感じられた。また、教育庁が児童生徒のために、備品や施設等の充実を図っていることは学校を訪問した理解できた。銀川市第二十四中学南校区での懇談会で、日本の教育を参考にしている事、日本の教育学者　佐藤学氏の教育理念を実践している事を聞き、驚いた。
どの学校でも、日本で以前行っていた選択授業を行っていた事は興味関心を持った。その学習内容に伝統文化に関わる内容があることである。現在、日本の学校教育は伝統文化に重きを持っていない。義務教育の間に伝統文化に対する芽を蒔くことが、我が国の伝統文化を継承することにつながると、改めて考えさせられた。

寧夏回族自治区の学校は不登校の児童生徒がいないと聞いた。日本の高度経済成長期の頃の子供たちは駄々をこねることなく、学校で学び、遊んでいた。生活が豊かで快適になるとともに、学校で学ぶことに対する意識が低下したのでは、と感じられる中国訪問であった。

[今後への活用:学校において]

Ⅰ:7月12日(火)担当している1年の学年集会において、写真を見せながら、中国で訪問した学校の様子や訪問先について話をした。時間が足らず、訪問先をすべて紹介することができず、2 学期以降に紹介する予定である。

Ⅱ:本校の教職員に向けて、2 学期に校内研修において報告会を予定している。

[今後への活用:その他において]

自分が所属する合唱団(さいたま市内小・中学校の教職員)で簡単ではあるが、報告を行った。

[中国との教育交流についての具体案]

本校は、平成 22 年度に韓国の中学生との教育交流を行った。内容は、本校で授業に参加し、共に給食を食べた。その後、全校生徒と文化交流を行った。また、平成 27 年度韓国の教員が本校を視察にした。内容は、本校の授業を自由に参観し、その後 2 グループに分かれて意見交換を行った。

その経験から同様の交流は行うことができる。ただ、本校から計画を立ててはいない。前例はさいたま市教育委員会の要請により行った。

日本が中国の教育に学ぶべきこと

大牟田市立米生中学校　高倉　洋美

今回の訪問は、とても有意義でいろいろなことを考えさせられたプログラムだった。中国の先を見据えたIT 教育の充実、グローバルな人材育成を目指す英語教育・・・等、中国に学ぶべきことが数多くあったと感じたのは私だけではなかったと思う。“十分な設備・備品・教材等、最良の環境で学ぶことが、十分な力も身につけることができるし、よりグローバルな人材と育つことができる”ということが近年の中国のめざましい活躍をみることで理解できる。日本の教育ももう一度見直さなければならないのではないか。その中でも私ができることはまず、自分自身の教師としてのスキルアップがとても重要だと実感した。子ども達のために、未来の日本のために。自分のために。

そして、何よりも有意義であったことは、国内の各地から集まった先生方と交流できたことだ。自分の学校のこと、日本の教育のこと、中国の教育のこと、互いに意見し合うことで、仲間が増え、大きな刺激となった。今後、国内の先生方、中国とのつながりを深め、未来の持続可能な社会づくりを担う子ども達を育んでいきたいと思う。

[今後への活用:学校において]

生徒たちに写真や映像を交えて、中国の子ども達の現状を知らせ、グローバルな視野を広めていきたいと考えている。また、自分が学んだことを活かした授業づくりを工夫していきたいと考える。そして、ユネスコスクールとして、国際理解教育の一環として、できれば海外からの訪問を受け入れることができるよう準備していきたいと考えている。

[今後への活用:その他において]

何よりも、国内の先生方と出会えたことが、今回のプログラムの大きな収穫であった。今後、さらに交流を深め、このつながりをもっと大きなもの、深いものしていき、子ども達の未来へのちからになればと思う。

[中国との教育交流についての具体案]

本校では、現在海外との交流はできていないので、うまくイメージできない。しかし、上海で教育部の方に大牟田市の ESD のパンフレットを渡したとき、「ESD！上海にもユネスコスクールがあります。」と声をかけていただいた。とてもうれしく、交流したいと意欲も湧いてきた。まずは、ESD を推進しているユネスコスクールとして、同じような取り組み(本校は福祉・世界遺産学習を中心に取り組んでいる)をやっているユネスコスクールと、情報交換から始めることができればと思う。

中国における教育事情

高知県立幡多農業高等学校　徳橋　佑哉

「百聞は一見に如かず」とは、まさにこのことだなと思い知らされる旅であった。訪中前は、自転車王国、都市部と少数民族のいる地域との教育格差、大気汚染や、路上にゴミが散乱していたりと、利己的な考えのもと、まだまだ発展途上国である顔をのぞかせるのでは、という一抹の不安があった。しかし、北京を始め、銀川、上海など各地を訪問したところ、そのような一面はあまり見られず、北京オリンピックを契機に経済的発展だけでなく、義務教育の普及はもちろんのこと、質の向上や公平な教育機会の提供、環境教育対策における意識改善も醸成されていたように感じた。

さて、中国の教育であるが、日本のように、国民一人ひとりの育成ではなく、社会主義国家を育成するた

めに教育をおこなっているというスタンスであった。しかし、日本の教育を重視しており、訪問した学校では、児童生徒の個性を伸ばすための芸術教育や、外国語教育、カウンセリングルームを設置するなど、国民一人ひとりの育成に力を入れているように感じた。ただ、手法が日本とは違っており、芸術教育では、クラス全員が同じことをするのではなく、自分の能力や良さが生かせる分野に自分自身で進んでいき、それが結果的に自らのアイデンティティーを形成することになり、自己肯定感が増幅しているように感じた。

[今後への活用：学校において]

LHR の時間を使い、撮影した写真や動画を見せ、中国で学び感じたことを生徒たちに還元し、生徒の価値観を広げる。また、校内研修の場面で、中国における教育事情についてパワーポイントを用い報告し、中国教職員訪日団の受け入れ準備を進める。

[今後への活用：その他において]

幡多支部理科部会において、「中国における理科教育」ということで発表をおこなった。中国で学び感じたことを、各種研修会を通して、伝えていきたい。

[中国との教育交流についての具体案]

11 月に中国教職員の訪日団が来られるということで、受け入れ準備を進めていきたい。農業高校という利点を活かし、授業見学や意見交換だけでなく、農業実習や施設見学もぜひ体験していただきたい。

知識は、運命を変える

豊中市立上野小学校　肥塚　友子

「知識は、運命を変える」―この言葉は、中国寧夏回族自治区にある寧夏育才中学で出会った言葉です。学校のモットーであるこの言葉が教職員のみならず、生徒にまで浸透していることを感じた。“自分自身の運命を変えるために、今まさに勉学に取り組んでいる”という、目的意識を生徒自身が明確に持っている強さを感じた。それは、この学校の生徒に限って感じたものではなく、訪問したそれぞれの学校でも共通して感じたものであった。そして、それは日本の子どもたちからは中々感じられなかったものだった。「何のため」という目的意識をもっている人は、強く、何かあったときに、原点に立ち返ることができる。日々の教育活動は、子どもたちの運命をよりよい方向へ導いていくためのものでなければならないし、中国の子どもたちのように、児童が明確な目的観をもって、学習に挑めるようにできる教師でありたい。この言葉と中国の子どもたちと出会い、改めて自身の教育観を問い直させられた。

[今後への活用：学校において]

私は、現在帰国児童 87 名の帰国担当・日本語指導をしております。帰国子女と一口でいっても、抱える背景や問題も様々です。近年、中国からの帰国生徒が増え、中には、現地校に通い、全く日本語が話せない状態で帰国した生徒もいます。そういった生徒には、「特別の教育課程」を実施し、個別に日本語指導を行っています。

今回、中国の現地校を訪問する中で、中国ならではの教育の特色や日本との教育の違いを知ることができた。今回体験したことを、帰国生徒やその保護者を理解していく際に役立てていきたい。日本という枠組みの中だけで考えたり、捉えたりするのではなく、広い視点で子どもたちを理解していくための素地としたい。

[今後への活用：その他において]

秋に、豊中市教育研究会の帰国生徒・国際理解教育研究会で今回の訪中プログラムの内容や体験したことを発表する予定です。近年の中国に関する様々な報道から、中国のイメージはマイナス方向に傾いています。実際に自分が体験したことを発信する中で、同じアジア人であり、懐の深い人間らしい中国の一面も知ってもらいたい。中国の教育事情や教育現場について、情報を発信し、共有していく中で、国際理解につなげたい。

[中国との教育交流についての具体案]

これまで中国との交流を行ったことはないが、本校はユネスコスクールであり、中国のユネスコスクールと提携を結ぶことができれば、交流することも可能である。近年中国からの帰国生徒も増えているので、中国の学校との交流は、子どもたちにとっても有意義である。これまで行ってきた他の国との交流と同じような形で、手紙のやりとりや文化の紹介などができると考えられる。

親日的な中国人

兵庫県立北須磨高等学校　壷井　宏泰

今回のプログラムを通じて、一番感じたのが中国人は親日的であるということだった。公式プログラムでお世話になった方々は当然としても、自由時間に接した中国人達が全て親日的であったことが驚きだった。北京の天安門広場で毎朝日の出と同時に開催され

ている国旗掲揚を見に行く時に、偶然ホテルのエレベーターで一緒になった中国人家族にタクシーに同乗させてもらった時にまず初めにそれを感じた。次に寧夏回族自治区で夜店を散策している時に偶然話をした方からも同様な思いをした。

日本にいると、政府間や民間レベルでも中国人は反日感情をもっているという報道に触れることが多い。私も今回のプログラムを経験するまでは、それが事実だと思っていた。しかし、それは単なる偏見であったことに気が付き、それらよる先入観が最も危険ではないかと感じた。

教育現場や、民間レベルでの交流をもっと活発化し、利害関係の無い学生や一般市民が、お互いの違いを尊重しあった上で理解し合えるようにしていくことが重要であると感じた。

[今後への活用：学校において]

まずは、教科の立場では、理科教育の在り方や環境教育の在り方について、中国人教師と議論できたことを現場で生かしていきたい。

次に、今回のプログラムで得られた一番の成果は偏見、先入観が最も恐ろしいということだ。宗教や育ちが違う人とは考え方が違うのは当たり前で、その違いを争いの火種にするのではなく、お互いに違いを尊重し合い、おもいやりを持って接することが重要であるということを伝えていきたい。これは、国際理解という範疇に収まる話ではなく、身近にいる人たちとの関わりでも重要である。

また、情報の信頼性という点でも注意喚起をしていきたい。現在は溢れるほどの情報が入ってくる。どの情報をどの程度信頼するのか、それを見極める能力を高める重要性を訴えたい。

[今後への活用：その他において]

兵庫県国際交流協会にホームステイボランティアの登録をして、毎年海外からホームステイを受け入れてきたが、中国の方にはまだ来てもらっていない。機会があれば積極的に受け入れたいと考えている。

[中国との教育交流についての具体案]

ここ2年連続して、台湾からの研修旅行生を受け入れている経験からすると、書道での交流やお互いの文化の紹介、英語での討論等が可能である。また、茶道や華道も近い文化であるが、違う点もあり、交流によっていろんな発見ができるであろう。しかし、SNSの規制等、慎重にならざるを得ない面もある。

中国の教育事情、社会の様子

寝屋川市立第十中学校　柳川　あずさ

近年、中国の教育水準の向上に力を入れている。今回の研修では、6 つの小・中・高・特別支援学校での研修に参加しましたが、すべての学校に共通していたのが“設備面”の充実でした。地下に50mプールを備えた学校や、3D プリンターを授業で使用する学校など、日本の学校では見られないような設備が多くありました。

授業形態にも大きく違った点がありました。現在の日本は、アクティブラーニングという生徒が主体的に課題について考えるほか、議論することが重視されていることが多い。しかし、中国では一斉授業を主流としており、黒板の内容をノートに書き写すといったことも少なかった。

教育事情のほかにも、中国の社会の様子を実感することもできました。内陸部と沿岸部での気候や食文化の違い、イスラム圏での回族の方たちの様子、人口の多さなど、今まで頭の中で学んでいた事柄を、実際に目や耳、身体で体感することができて、とても貴重な経験となりました。

[今後への活用：学校において]

・職員会議における中国の教育事情報告
・生徒集会において、国際理解を深めるための報告

[中国との教育交流についての具体案]

生徒同士の文化交流を行いたい。日本と中国の伝統的な文化の交流(伝統的な衣装や楽器，食文化など)を、生徒同士が実際に実演することで行いたい。現在のところ実施の予定はないが、機会があればぜひ検討したいと考えている。

6. 随行者のコメント

国際連合大学　大学院　事務局長
古田　知美

北京、寧夏回族自治区、上海の教育部や教育庁、各教育機関訪問にあたり、多くの方々に歓待いただき、見学や質問に丁寧にご対応いただきました。中国の学校の設備や幅広いカリキュラムに圧倒されると同時に、中国の教職員の皆様の熱意や様々なことに挑戦する生徒たちの楽しそうな姿が印象的でした。

また、日本からの参加者は、それぞれの訪問は短い時間でしたが、積極的に質問し、できる限り中国の教職員・生徒との交流を持とうと意欲的に行動されていました。先生方のご努力で一層充実した訪問になりました。このプログラムを通して、中国の教育を理解するだけでなく、中国文化に親しみを覚え、中国の皆様のおもてなしの心に感銘を受けたことと思います。この事業が今後の日本と中国の教育交流の推進に繋がっていくことを期待しています。

文部科学省　初等中等教育局
課長補佐　齊藤　大輔

中国政府日本教職員招へいプログラムに随行させていただき、ありがとうございました。今回、初めて中国を訪問しましたが、想像していた以上に学校の施設が整備されていたことに驚きました。訪問した全ての学校・教室で電子黒板があり、また多くの学校で 3D プリンタも授業に取り入れるなど ICT の活用に積極的でありながら、一方で、昔ながらの伝統的な遊びや工芸もしっかり授業に取り入れており、バランスの取れた教育課程を組み、児童生徒に多様な学びを提供できていると感じました。すべての学校にこのような整備をすれば、国家・地方予算のどの程度の割合を教育費に計上しているのかが非常に気になりました。今回の視察を通して受けた様々な刺激を、これからの仕事に活かしていきたいと思います。

文部科学省　大臣官房国際課
企画調査係/調査係　佐伯　祐哉

本事業は、中国の教育を学び、また両国の相互理解を促進する良い機会であると感じました。教育施設を訪問し、全体的に中国の教育は自由度が高く、できる子を伸ばす教育が進んでいるという印象を持ちました。また、視察中または座談会の場では、教員の方々全員熱心に説明を聞いておられました。ただ、グループワークの場が少なく、意見をまとめる機会が少なかったため、訪問場所を若干減らし、グループワークの場を設けることにより、文化的背景や教育事情について理解を深めることができ、より良い事業になると感じました。これまで同様、日本、中国双方の学校間の新しい相互交流が誕生し、両国の相互理解を深めていくことができればうれしく思います。

ユネスコ・アジア文化センター
人物交流部　有薗　佳子

本プログラムでは今回で 2 度目の訪中でした。本事業参加前の日本の先生方の中国に対するイメージは、ニュースや新聞などで得た情報が殆どであり、ステレオタイプのイメージを持っている方が多くいらっしゃいます。しかし本事業参加後は、中国で実際に出会った人の顔や経験したことを思い出しながら、具体的な良いイメージを持てるようになることが、本事業最大の成果ではないかと思います。

帰国後も参加された先生方と訪問校の交流が続くように、今後は中国の訪問校での児童生徒との交流や、日本の先生方による中国の児童生徒に対しての授業体験などを計画し、今後も本事業に携わっていきたいと思います。今回参加された先生方をはじめ、お世話になった全ての方に感謝申し上げます。

ユネスコ・アジア文化センター
人物交流部　河口　枝里子

この度、初めて本プログラムの随行させていただきました。参加者の先生方とお話を聞きながらの旅で気づいたことがあります。先生は、国を超えどこにいても、学校と子どもたちが好きであること。それは、中国の子どもたちにも、先生方にも伝わったと思います。熱心に校内見学したり質問をしたりする姿、最高の笑顔で子どもたちと交流する姿が忘れられません。今回中国で学び得たことを、今後生かしていただきたいと同時に、分け隔てなく子どもが好きであること、相手を知ろうという積極的な姿勢を大切にしてもらいたいと思っています。今後もこの交流事業が、未来の友好と持続的発展につながるよう、尽力したいと思います。また、お世話になった皆さまに深く感謝いたします。

◆付録．プログラム写真

中国教育部の前で記念撮影（北京市）

国際連合大学大学院古田知美事務局長よりあいさつ
（出発前オリエンテーション　東京都）

中国教育部主催歓迎会での記念品交換
左：団長　宮下哲夫氏　右：中国教育部　陳盈暉氏

歴史的代物や生徒の作品を展示する芸術室
（北京師範大学附属実験中学校）

実験サロンと呼ばれる部屋。室内には、本や衣装が置かれている。（北京師範大学附属実験中学校）

寧夏回族自治区教育庁への表敬訪問（銀川市）
左から：于虹氏、王建平氏、孫忠銘氏、張可生氏、従宏氏

竹ダンスをする日本教職員 （銀川市第二十一小学）

児童に教わりながらカップダンスに挑戦（銀川市第二十一小学校）

豊中市立上野小学校の児童が制作した鯉のぼりと手紙を
プレゼント （銀川市第二十一小学校）

訪問団による「さくらさくら」「茉莉花」の披露
（銀川市第二十四中学南校区）

職員室で生徒の宿題を見せてもらう様子
（銀川市第二十四南校区）

サークル活動を見学する様子 （寧夏育才中学）

自習の様子 （寧夏育才中学）

イタリアで開発された教材に取り組む様子
（寧夏特殊教育学校）

生徒によるダンスの披露 （寧夏特殊教育学校）

「賀蘭山岩画」の入り口

電動カートで移動する日本教職員 （賀蘭山岩画）

教員のプロフィール写真（浦東新区洋涇実験小学校）

中国少数民族のダンスを披露する様子（浦東新区洋涇実験小学）

外灘から眺める浦東の景観

中華芸術宮の前で記念撮影（上海市）

◆資料１

国 際 連 合 大 学

2015-2016年　国　際　教　育　交　流　事　業

中国政府日本教職員招へいプログラム

(2016年6月12日(日)－6月19日(日)：　中国／北京市、寧夏回族自治区、上海市)

実 施 要 項

１．背景

国際連合大学は公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）を委託機関として、「国際教育交流事業」のひとつとして、中国から初等中等教育教職員を招へいするプログラムを実施してきました。2002年より開始されたこのプログラムにより、これまで1,588名の教職員が日本を訪問し、我が国の教職員との交流を深め、日中両国間の相互理解と友好の促進に貢献してきました。

2003年からは上記プログラムと対をなすものとして、日本の教職員10名を中国へ派遣してきましたが、これら交流事業の成果が中国政府に評価され、日中国交正常化35周年を記念する2007年からは中国政府教育部による招へいプログラムとして実施され、さらなる交流の発展を目指すこととなりました。

２．目的

(1)中国の教育制度および教育課題への理解を深め、成果を学校・地域の教育活動に還元すること
(2)教育現場での交流・意見交換を通し、日中教職員間の持続的な相互交流を育み、日中両国の教育の質を高めること
(3)中国の文化全般への理解を深めること
(4)日中両国の相互理解と友好を促進すること

３．活動内容

(1)中国の教育政策の現状と課題についての研修
(2)中国の教職員および児童生徒との、教育現場での交流
(3)学校および教育・文化施設の視察

４．日程

出発前オリエンテーション：2016年6月11日（土）
プ ロ グ ラ ム 実 施 期 間：2016年6月12日（日）－6月19日（日）　(8日間)

日付	日程	訪問先	活動
6月11日（土）	前日（午後）	東京都内	出発前オリエンテーション
6月12日（日）	派遣第1日目	北京市	羽田出発 北京首都国際空港到着
6月13日（月） ｜ 6月18日（土）	派遣第2日目 ｜ 派遣第7日目	北京市 寧夏回族自治区 上海市	中国教育部表敬訪問 訪問先自治体の教育委員会表敬訪問 学校訪問 教育・文化施設等見学
6月19日（日）	派遣第8日目		上海出発（成田、関西、福岡へ） 日本の各地へ到着

注：訪問先、活動内容については変更の可能性があります。スケジュールの確定は出国約1週間前頃を予定しております。

５．参加者

下記の教職員、随行員、計25名程度の参加とする。
(1)2014-2015および2015-2016年中国教職員招へいプログラムの受入れ教育委員会または受入れ校が推薦する教職員
(2)2016-2017年中国教職員招へいプログラム受入れ予定の教育委員会が推薦する教職員
(3)日中間の教職員交流に高い関心を持つ自治体または学校の教職員
(4)国際連合大学、文部科学省、ACCUの職員

６．参加資格

(1)日本国民であること。

(2)所属する教育長・学校長等から推薦を受けた、初等中等教育教職員（教育行政職員を含む）であること。特に、在職３年～15年程度の教員が望ましい。

(3)将来にわたり中国との具体的な教育交流の推進に寄与できること。特に、中国との学校／教員／児童生徒／地域間の各交流、または定期的な情報交換等を推進する立場にある者が望ましい。

(4)健康で、オリエンテーションを含めたプログラムの全日程に参加が可能であること。

(5)団体行動の規律を守り、主体性を持って積極的に参加ができること。

７．評価と報告

参加者は、プログラム終了後、所定の報告用紙によりACCUに報告書を２回提出する。

(1)　第１回参加者報告書提出期限：7月19日（火）12：00
　　※主にプログラム中の成果について報告

(2)　第２回参加者報告書提出期限：12月９日（金）12：00
　　※主に帰国後の取組みやその成果について報告

８．渡航費等諸経費

(1)中国政府が下記について負担する。

- 中国国内の移動に要する交通費
- 中国滞在中の宿泊
- 中国滞在中の食事
  ＊中国政府から日当は支払われませんが、中国滞在中の食事が手配されます。
- プログラムの運営に必要な経費（通訳等）

(2)ACCUが下記について負担する。

- 日本（往路：羽田、復路：成田・関西・福岡のうち最寄り空港）と指定された中国の国際空港間のエコノミークラス航空券
- 日本国内交通費：オリエンテーション日の会場までの交通費および帰国日の到着空港からの交通費の定額（ACCUの規定に準ずる）
- オリエンテーション当日（6月11日）の宿泊

注１：オリエンテーション当日、開始時刻までに到着可能な交通手段がない場合に限り、前日（6月10日）の宿泊費を支給します。

注２：帰国当日中に居住地に到着可能な交通手段がない場合に限り、帰国当日（6月19日）の宿泊費を支給します。

注３：本プログラムには公務にてご参加をお願いしておりますため、期間を通してACCUから日当は支給しません。各所属先にてご負担をお願いします。

(3)各参加者の負担

- 海外旅行保険料：プログラム期間中の万一の事故に備え、出発前に必ず各自の責任において加入しておくこと。
- 上記（1)、(2）以外の諸経費

(4)旅券と査証について

- 旅券（パスポート）：入国時に６ヶ月以上有効なパスポートを各自で準備すること。
- 査証（ビザ）：一般旅券の場合は、ビザの取得は不要。

９．通訳

プログラム期間中は、日本語‐中国語間の通訳を中国政府が配置する。

１０．このプログラムに関する照会先

公益財団法人　ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）　人物交流部
〒162-8484　東京都新宿区袋町６番地　日本出版会館
TEL:03-3269-4498/4435　　FAX:03-3269-4510
E-mail:accu-exchange_ml@accu.or.jp

◆資料 2

国際連合大学
2015-2016 年　国際教育交流事業
中国政府日本教職員招へいプログラム

日程表

日にち	時間	内容	宿泊
6/11(土)	13:30-14:00	オリエンテーション受付	ホテルサンルート品川シーサイド 東京都品川区東品川 4-12-8 Tel:03-6716-0011
	14:00-17:40	オリエンテーション、終了後チェックイン	
	19:00-20:30	懇親会	
6/12(日)	5:50	各自チェックアウト、ホテルロビー集合	北京西西友誼酒店 北京西単北大街 109 号 Tel:010-59319898
	6:00	ホテル出発	
	6:30	羽田空港到着、チェックイン	
	8:30-11:20	羽田空港～北京首都国際空港 CA184	
	13:00-14:00	昼食	
	15:00-17:00	故宮、天安門見学	
	17:00	ホテルにチェックイン	
6/13(月)	8:40	ホテル出発	銀川海悦建国飯店 銀川市興慶区南薫東街 3 号 Tel:0951-6080777
	08:50-10:20	北京師範大学附属実験中学訪問 （学校訪問 1 校目）	
	10:30-11:30	中国教育部表敬訪問	
	12:00-13:00	中国教育部歓迎会（昼食）	
	13:00-13:30	着替え、チェックアウト	
	13:30-15:30	北京国会体育場（鳥の巣）視察	
	15:30-16:30	北京首都国際空港空港へ移動	
	17:50-20:00	北京～銀川 CA1263	
	21:30	ホテルチェックイン	
6/14(火)	9:00	ホテル出発	
	09:30-11:00	寧夏回族自治区教育庁表敬訪問	
	11:30-13:00	寧夏回族自治区教育庁歓迎会（昼食）	
	13:30-14:30	休憩	
	15:00-17:00	銀川市第二十一小学訪問 （学校訪問 2 校目）	
	17:30	夕食	
6/15(水)	8:10	ホテル出発	
	09:00-11:00	銀川市第二十四中学南校区訪問 （学校訪問 3 校目）	
	11:30-13:00	昼食	
	13:00-14:00	休憩	
	14:10	ホテル出発	
	15:00-17:00	寧夏育才中学訪問 （学校訪問 4 校目）	
	17:30-19:00	夕食	
	19:30-20:30	寧夏中阿之軸、夜景見学	

◆資料 2

6/16(木)	8:10	ホテル出発	銀川海悦建国飯店 銀川市興慶区南薫東街 3 号 Tel:0951-6080777
	09:00-11:00	寧夏特殊教育学校訪問 （学校訪問 5 校目）	
	11:30-13:00	昼食	
	13:00-18:45	賀蘭山岩画、西夏王陵見学	
	18:45-20:00	夕食	
6/17(金)	6:40	ホテル出発	上海江蘇飯店 上海市武寧路 888 号 Tel:021-62051888
	7:30	銀川河東国際空港到着	
	7:45-10:15	銀川～上海 MU5276	
	12:00	ホテル到着	
	12:20	昼食	
	14:00-15:30	浦東新区洋涇実験小学訪問 （学校訪問 6 校目）	
	16:00-17:30	外灘見学	
	18:00	夕食	
6/18(土)	9:00	ホテル出発	
	09:30-11:00	中華芸術宮見学	
	11:30	昼食	
	13:00-14:00	豫園見学	
	14:00-17:30	自由研修	
	17:30	集合	
	18:00	夕食	
6/19(日)	6:10	ホテル出発	
	7:10	上海浦東空港到着 3 路線に分かれて帰国 上海浦東～関西 CA921 09:10-12:10 上海浦東～成田 CA929 10:00-13:50 上海浦東～福岡 CA915 12:10-14:40	

【中国側随行者・通訳】

北京・寧夏回族自治区・上海:
中国教育国際交流協会
国際協力部　徐穎

寧夏回族自治区:
寧夏大学
講師　　于虹
学生ボランティア　　尚梅
学生ボランティア　　畢偉宸

上海:
上海教育国際交流協会
副秘書長　陳琼
項　芸芸
朱　家儀

◆ 資料 3　参加者・関係者リスト

1.　参加者(20 名)

Aグループ

A-01	宮下 哲夫	MIYASHITA　Tetsuo	大牟田市立羽山台小学校	校長	福岡県
A-02	芳賀 裕美	HAGA　Hiromi	市川学園　市川中学校	専任教諭	千葉県
A-03	伊藤 陽一	ITO　Yoichi	千葉県立佐倉南高等学校	教諭	千葉県
A-04	鎌野 慶子	KAMANO　Keiko	奈良市教育委員会事務局　学校教育課	指導主事	奈良県
A-05	町田 登志子	MACHIDA　Toshiko	千葉県立鎌ヶ谷西高等学校	教諭	千葉県
A-06	松村 隆寛	MATSUMURA　Takahiro	狛江市立狛江第三小学校	主任教諭	東京都
A-07	根岸 綾子	NEGISHI　Ayako	埼玉大学教育学部附属中学校	教諭	埼玉県
A-08	大坂 真央	OSAKA　Mao	高知県立中村特別支援学校	教諭	高知県
A-09	對馬 俊晴	TSUSHIMA　Toshiharu	福島県立ふたば未来学園高等学校	教諭	福島県
A-10	米村 光生	YONEMURA　Mitsuo	荒尾市教育委員会振興課	指導主事	熊本県

Bグループ

B-01	河田 重吉	KAWATA　Shigeyoshi	長崎市立高城台小学校	校長	長崎県
B-02	圓山 裕史	MARUYAMA　Hirofumi	奈良市立飛鳥小学校	教諭	奈良県
B-03	奥谷 貴子	OKUYA　Takako	MIHO 美学院中等教育学校	教諭	滋賀県
B-04	佐久 間みのり	SAKUMA　Minori	札幌市立月寒小学校	教諭	北海道
B-05	関根 朱美	SEKINE　Akemi	さいたま市立木崎中学校	教諭	埼玉県
B-06	高倉 洋美	TAKAKURA　Nadami	大牟田市立米生中学校	教諭	福岡県
B-07	徳橋 佑哉	TOKUHASHI　Yuya	高知県立幡多農業高等学校	教諭	高知県
B-08	肥塚 友子	HIZUKA　Tomoko	豊中市立上野小学校	教諭	大阪府
B-09	壷井 宏泰	TSUBOI　Hiroyasu	兵庫県立北須磨高等学校	教諭	兵庫県
B-10	柳川 あずさ	YANAGAWA　Azusa	寝屋川市立第十中学校	教諭	大阪府

2. 主催者代表

A-11	古田　知美	FURUTA　Tomomi	国際連合大学	大学院　事務局長	東京都

3.　日本側機関

A-12	齊藤　大輔	SAITO　Daisuke	文部科学省初等中等教育局	課長補佐	東京都
B-11	佐伯　佑哉	SAEKI Yuya	文部科学省大臣官房国際課	企画調査係/調査係	東京都
A-13	有薗　佳子	ARIZONO Yoshiko	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	人物交流部職員	東京都
B-12	河口　枝里子	KAWAGUCHI　Eriko	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	人物交流部職員	東京都

4. オリエンテーション講師

新井　聡	ARAI Satoshi	文部科学省　生涯学習政策局参事官付	専門職	東京都

5. 中国側機関

胡　志平	HU Zhiping	中華人民共和国駐日本国大使館	公使参事官	東京都
陳　盈晖	CHEN Yinghui	中国教育部国際合作交流司	副司長	北京市
王　建平	WAN Jianping	寧夏回族自治区教育庁	副庁長	銀川市

◆ 資料 4

過去のプログラム実績

実施期間	開催地	訪問人数
2003 年 3 月 2 日～8 日	北京市、浙江省杭州市、上海市	12 名
2004 年 4 月 25 日～5 月 2 日	北京市、天津市、遼寧省大連市	15 名
2005 年 5 月 22 日～29 日	北京市、新疆ウイグル自治区烏魯木斉市、上海市	14 名
2006 年 5 月 21 日～28 日	陝西省西安市、天津市、北京市	14 名
2007 年 5 月 20 日～27 日	北京市、海南省(海口市、三亜市)、上海市	22 名
2008 年 6 月 15 日～22 日	北京市、青海省、上海市	22 名
2009 年 6 月 21 日～28 日	北京市、内蒙古自治区(呼和浩特市、包頭市)、上海市	25 名
2010 年 5 月 30 日～6 月 6 日	北京市、貴州省貴陽市、上海市	25 名
2011 年 5 月 29 日～6 月 5 日	北京市、湖南省長沙市、上海市	25 名
2012 年 5 月 27 日～6 月 3 日	北京市、内蒙古自治区呼和浩特市	25 名
2013 年 6 月 23 日～29 日	北京市、甘粛省蘭州市	25 名
2014 年 5 月 18 日～25 日	北京市、貴州省貴陽市、上海市	50 名 2012-2013 年枠:21 名 2013-2014 年枠:29 名
2015 年 5 月 24 日～31 日	北京市、広西チワン族自治区(南寧市、桂林市)、　上海市	25 名
2016 年 6 月 12 日～19 日	**北京市、寧夏回族自治区(銀川市)、上海市**	**25 名**

計 324 名

●国際連合大学 2015-2016 年国際教育交流事業●
中国政府日本教職員招へいプログラム
実施報告書

2016 年 8 月
編集・発行

国際連合大学[UNU]
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター[ACCU]

〒162-8484
東京都新宿区袋町 6 番地　日本出版会館
電話　(03) 3269-4498
Email　accu-exchange_ml@accu.or.jp
URL　http://www.accu.or.jp

Printed in Japan by Wako Inc. [120]
ⓒ2016　Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)